第7期

事業報告書

（第7期:平成 29 年 5 月 1 日～平成 30 年 4 月 30 日）
期間:2017 年　5 月 1 日　～　2018 年　4 月 30 日

平成 30 年 6 月 29 日

認定特定非営利活動法人Switch

■ミッション

すべての人々が、いきいきと誇り高く生きてゆけるよう、
継続的に「学び」「働き」「共生する」場を提供してゆきます。

そのために何が必要で、どのようなサービスが求められているかを検証し、
常にスピードをもって遂行してゆきます。

また、ひとりひとりの個性や強み、自分らしさを重視し、
それぞれの力を最大限に発揮するためのサポートをしてゆきます。

■ビジョン

わたしたちは近い将来、学ぶことや働くこと、
さらには生きることすらあきらめてしまう人々を、ゼロにしたいと考えます。

わたしたちは近い将来、すべての人々が自分らしい生き方を取り戻し、
活気あふれる社会を築いてゆきたいと考えます。

これらの課題は特定の地域の問題ではなく、
現代を生きる社会全ての問題と捉え、広く世界に発信してゆきます。

■はじめに

2017 年度は、法人のビジョンでもある「学ぶ・働くという観点から、多様性を認め合う社会に」をモットーにしながら、社会情勢の変容の中で次の 5 年に向けた準備をする期間でもありました。内閣府による「社会的インパクト評価」、さらにデロイトトーマツコンサルティング合同会社の支援を受け「組織基盤強化プロジェクト」に職員全員でコミットした中長期計画の取り組みにチャレンジをはじめたことは、大きな節目にあたる年だったと総括できます。石巻では、子ども・若者の多様で複雑な課題解決のための一環として高校連携事業もスタートし、フィールドを超えたかかわりを大事にしながら、地域に根ざした活動も強化されつつあります。
障害福祉サービス事業においても、宮城県全体の障害者の雇用促進に寄与していく取り組みの一歩ともえる「働き続ける」ための事業も平成 28 年度から継続的に実施し、地域連携の一助となる活動も行って参りました。次年度に向けて、改めて法人のビジョン・ミッションを確認し合いより地域に寄り添い、受益者の方々の思いに寄り添いながら、多様性を大事にした活動を行っていくことができればと考えます。

認定特定非営利活動法人 Switch　理事長　高橋由佳

■認定 NPO 法人 Switch の事業概要

Ⅰ．就労移行支援・自立訓練（生活訓練）に関する事業

●スイッチ・センダイ

事業内容：障害福祉サービス事業：就労移行支援事業所

住所:宮城県仙台市宮城野区榴岡 1-6-3　東口鳳月ビル 601

・平成 29 年度事業概況

スイッチ・センダイでは平成 29 年度３６名の就職者（Ａ型移行者含む）が出ている。就労後の定着支援では、訪問型ジョブコーチ事業と連携し就職後の定着支援を行った。

また、就職者を対象に平成 29 年度も継続して就労定着と余暇支援の一環とし、ＯＢ会を実施した。長期の定着支援という場合には就労定着支援を実施する地域の事業者の動向も注視しながら連携を行っていく必要があると思われる。

仙台市内の就労移行支援事業所は増加傾向にあり、平成 30 年 5 月現在では市内に 41 か所となっている。大手の就労移行支援事業者や復職に特化した事業者の進出があるため、さらに事業者の数も増えていく。このような状況の中、今後も一層、強みを活かしたサービスの向上が必要不可欠である。

◈実績

平成 29 年度相談件数（件）

10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代
2	41	33	15	6	1

男女比

男性	女性
49	49

紹介元

行政機関	相談支援機関	医療機関	ハローワーク	パンフレット	学校	ＨＰメディア	知人・友人・家族	その他
10	19	31	4	0	3	15	4	8

その他の内訳

元利用者 5、合同事業所説明会 2、ピアカウンセリング 1

平成 29 年度在籍者数

就労移行支援（81 名）

10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代
2	40	18	14	6	1

男女別

男性	女性
39	42

就職者状況（平成 30 年 3 月 31 日）

開示	非開示	合計
18	18	36

ＯＢ会・交流会参加人数（のべ）

平日開催	土曜日開催	合計
70	74	144

◈活動内容

個別の時間での相談を中心に行いながら、各種講座の参加・ウォーキング・アートプログラム・ＣＢＴ（認知行動療法）・ＰＣ講座・就活講座・コミュニケーション講座・ジョブコーチと話そう・パンフレット封入作業・ヨガ・ＯＢ交流会等

平成 29 年度　スイッチ・センダイ　管理者　山下祐史

●スイッチ・イシノマキ

事業内容：障害福祉サービス事業：自立訓練（生活訓練）

住所：宮城県石巻市鋳銭場 1-9　2 階

・平成 29 年度事業概況

開所から 3 年が経ち、スイッチへの紹介も医療機関、相談支援事業所からの紹介が増えてきていることから地域に認知されてきている事がわかる。

同時に、昨年度は就職、復職等のポジティブな退所者が多く見られており、地域の就業・生活支援センターからも、働く＝就労移行に行く　だけではなく、自身をしっかり見つめ、自身の特徴に合わせた生活リズムを獲得する自立訓練と言う選択肢もあるとの評価を頂くなど、大きな成果を得る事ができたと言える。

就職者が出る事で、相談支援事業所をはじめ、医療機関やハローワーク、就業・生活支援センター、障害者職業センター等の多くの機関と連携する機会も増え、より地域と密着した支援を実施することができた。

課題としては、目標達成し退所された方が地域とどのように関わっていくかを、連携事業所全体で考えていき、退所後も地域全体で支えていけるようなネットワークを継続していく事が課題となる。

同時に、利用者が増えてくることで職員のフットワークの軽さが失われやすい状況になるため、支援の質を維持しながらも多くの方に利用して頂けるよう努めていく事が課題となると考える。

◈実績（H29/4～H30/3）

登録者数	12 名（30 年 3 月末時点）
.新規利用者数	10 名
インテーク者数	22 名　※内訳は下記表参照

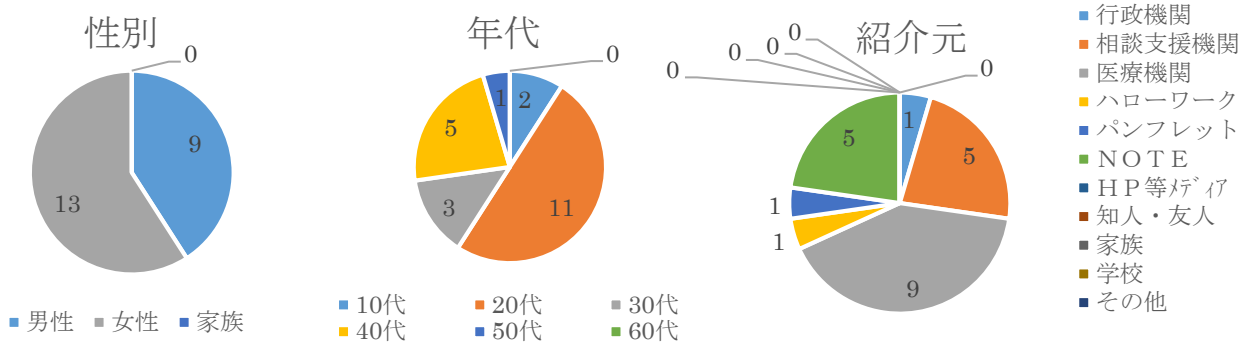
退所者数	8 名 平均利用期間約 325 日	目標達成　6 名（就職・・開示 3 名、復職 1 名、A型事業所 1 名、地域移行 1 名）
		体調不良　1 名（入院 1 名） 本人都合　1 名

29 年度は 6 名の方が目標達成として退所され、就職者が 3 名、復職 1 名、A 型利用 1 名、他 1 名と退所者の半数以上が就職、復職となった。精神疾患、発達障害をお持ちの方が一定の自立度に達することで就職に大きく動き出す事がわかった。
特に就職を強いている訳ではなく、利用者自身で選択した目標の実現に向けて生活リズムを整え、自己理解を深めたり、疾病管理を意識できるようなりたいという希望に伴走していくという、自立訓練としての活動の結果である。

H29年度（H29年4月～H30年3月）インテーク総数

インテーク総数		22名	左記の内利用につながった人数		10名	(45%)
前年度対比	22名	100%	前年度対比	9名	111%	

内訳										
年代						性別				
10代	20代	30代	40代	50代	60代	男性	女性	家族		
2	11	3	5	1	0	9	13	0		
紹介元										
行政機関	相談支援機関	医療機関	ハローワーク	パンフレット	NOTE	HP等ﾒﾃﾞｨｱ	知人･友人	家族	学校	その他
1	5	9	1	1	5	0	0	0	0	0



問い合わせとしては女性からの問い合わせが多く、年代的には 20 代が半数を占めている。
医療機関からの紹介が多いのが特徴的で、次いで相談支援事業所、石巻ＮＯＴＥからの紹介となっている。

◈活動内容

【個別ワーク】

・個別の自立の為の目標を達成するために、各々に必要な活動を取り入れ積極的に行っていく活動。

【プログラム】

・体調管理系のプログラムや、就職活動系プログラム、金銭プログラム等により、自己理解、目標達成の為のスキル、生活スキル向上の為のプログラムを実施。またファームを利用したアセスメントと余暇活

動の実施。

【外部講師】

ハローワークの職員による仕事に対するＱ＆Ａ、石巻市による歯科検診、指導

ハローワークによる出前講座

【自主活動】

・利用者の自主性や、希望等を形にする過程の確認、他者との協働作業等を体験できる機会として活用。トレッキングや花見、調理プログラム等実施

その他、季節等に合わせた行事等を行い、楽しみながらも一人ひとりの自立に向けた活動を行っている。同時に、実施者の興味関心に基づくプログラムになり、それらの活動の報告（ブログ作成）を行う事で、自己肯定感の向上につながっている。

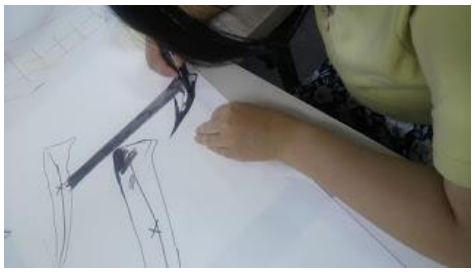
お菓子作り

利用者ブログ

【その他の活動】

卒業後の活動場所の一つである他事業所の見学会や地域の活動補助として七夕飾り作りやお祭り運営の手伝い等、事業所外に出ての積極的な地域活動を実施。

七夕飾り作り



お祭り準備ボランティア

事業所見学

スイッチ・イシノマキ　管理者　田口雄太

Ⅱ　思春期・青年期を中心とした就学・就労支援

●ユースサポートカレッジ仙台 NOTE

事業内容：ユースサポート事業

宮城県仙台市宮城野区榴岡 1-6-3　東口鳳月ビル 602

・平成 29 年度事業概況

⑴ユースサポートカレッジ　仙台 NOTE

◆成果と今後の課題

開設4年目を迎え、蓄積されたノウハウと実績を元に、背景に困難を抱えた思春期・青年期のグレーゾーン等の若者に対する通所型の就労準備支援事業(ユースサポートカレッジ事業)を実施。

昨年度までの4ヶ月間を1タームとした短期型のスタイルを見直し、利用期間を限定せず随時登録型のスタイルに変更。これにより新規相談者・登録者数が昨年の約2倍となり、相談やプログラムなどの述べ利用人数は前年対比120%、1000 人を超えるという結果となった。相談者の声を取り上げても、就労・就学に困難を抱えたグレーゾーン等の若者に関する相談場所が殆ど存在せず、保護者からも相談先に困っているという声が多く聞かれ、既存の制度や社会資源内では補えていないことが読み取れる。又今年度は休学中や休学予備軍といった大学生、専門学校生の紹介や利用が増加した。教育機関でもグレーゾーン等の学生の対応が課題となっているというお声が多く聞かれることから、教育機関における中退予防支援の需要の高さを実感した。

登録利用者の具体的な成果としては、個別相談を軸に各種プログラムやインターンシップの参加を通して、62名の登録者に対し32%就職、20%が復学・就学・進路決定、19%が就職中ということで全体の 7 割が就労・就学への前向きな変化を遂げることが出来た。

課題としては、今後社会の要望にお応えしていくために、継続性のある運営基盤を作っていくことがあげられる。これまでの実績を広く発信し若者支援の事業所として広く認知して頂くため活動に注力していくことが今後のミッションとしてあげられる。

又 2015 年から継続している通所スタイルの枠を超えた出張型就労支援事業をNOTE事業として今年度も実施。被災地向け出張パソコン講座を石巻を中心にニーズの多い被災圏域 6 地域に展開した。震災から7年が経ち仮説住宅から復興公営住宅への移転が進み、次なる段階として長期的な生活の見通しを立てるための就労の安定と地域定着が課題となっており、震災を機にひきこもりがちになり社会と接点が持てない被災者や、就労の機会を失ってしまった若年層に社会と繋がるきっかけを作りを目標に、学びの場を提供した。

今年度は開催前から地域の行政機関や支援団体、地元の方から開催についての問い合わせを頂き、殆どの地域が10名定員枠が満席となった。震災に関する就労アンケートからも、震災を期に状況が変わり就労の意欲はあるが環境面にて難しい状況にある方々が多く存在し、被災圏域の就労はまだまだ課題が多いと感じている。地元の皆様から頂いた声を受け止め、被災地特有の就労課題に対し今後も求職者と求人企業の両面の視点から取り組んで行きたい。

◆就労準備支援事業（ユースサポートカレッジ事業）

■新規相談(インテーク)件数　80件（本人74名・保護者5名・企業１社）
昨年対比　160%

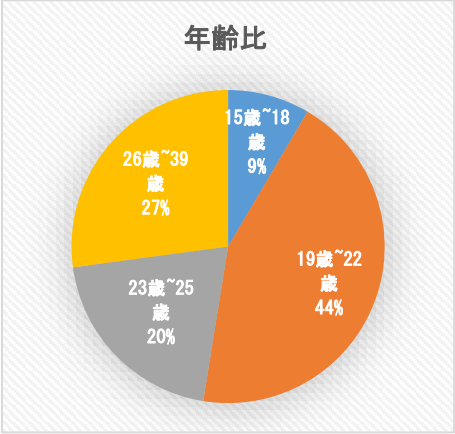
■仙台 NOTE 登録利用者数　62名（男性26名・女性36名）　昨年度対比177%

■仙台 NOTE 述べ相談・プログラムなど利用件数　1，171件（昨年度対比120%）

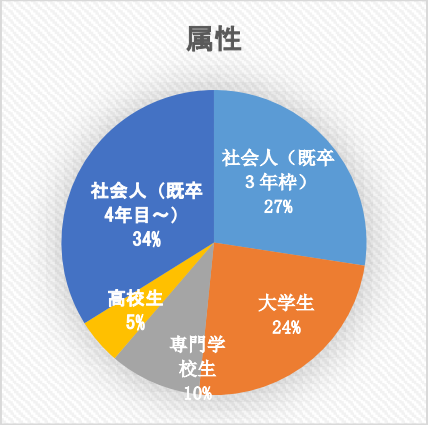
■就職決定者数　19名（昨年度対比135%）

■復学・就学者数　7 名(昨年度対比 140%)

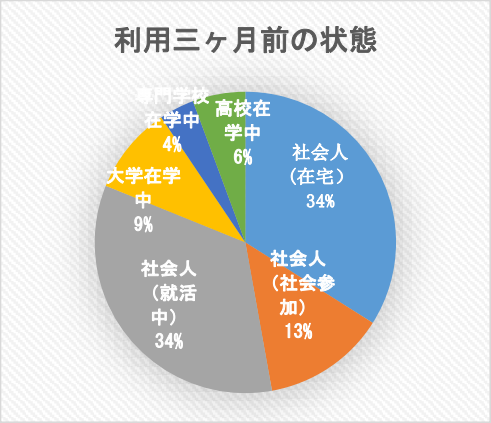
■利用者の詳細



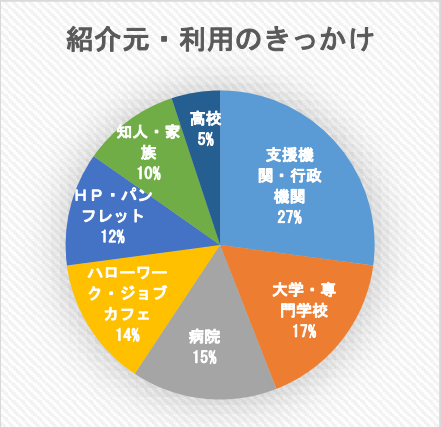
15 歳から 25 歳までの層が 7 割以上



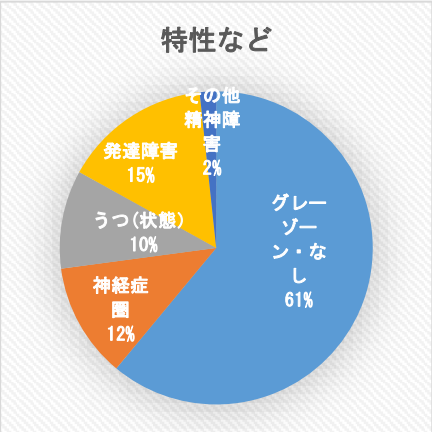
在学中の学生が 4 割弱。社会人は既卒 3 年目枠が 3 割弱



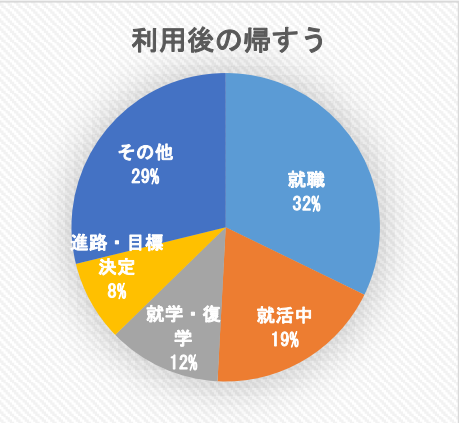
・社会参加とは週 2 回程度の外出、在宅とはそれ以下で在宅中心
約半分が三ヶ月前は在宅・社会参加の状態であった



教育機関からの紹介・利用と自発的に HP 検索がきっかけになっている層が増加

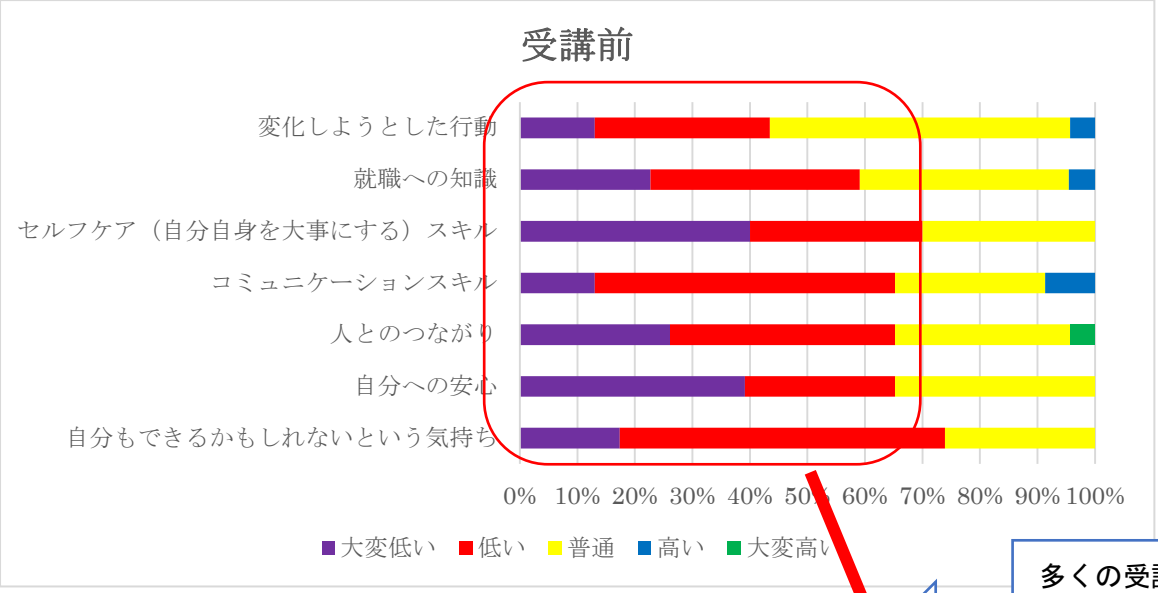


6 割がグレーゾーン層の方
発達障害をお持ちの方は障害者手帳のない方が利用

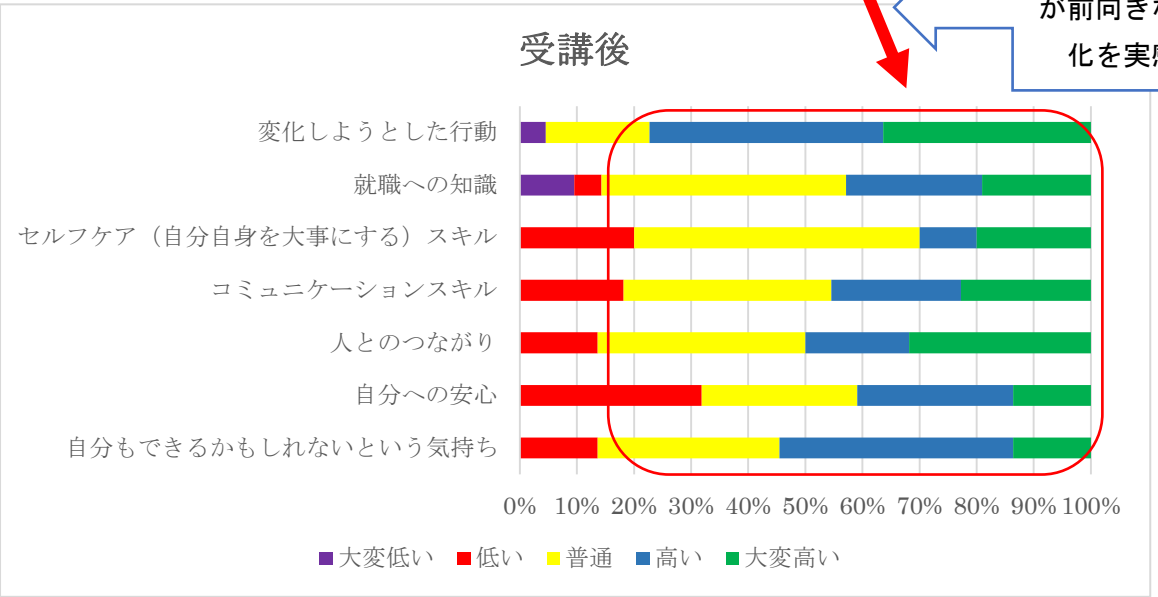


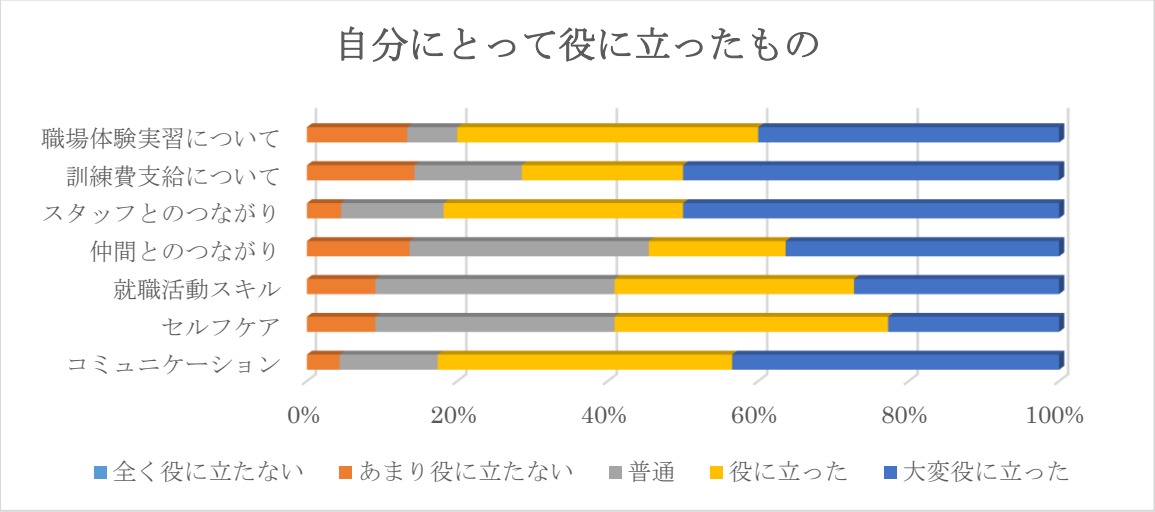
・社会参加とは週 2 回程度の外出、在宅とはそれ以下で在宅中心
約半分が三ヶ月前は在宅・社会参加の状態であった

■受講前と受講後の変化について（修了時アンケートより）



多くの受講生が前向きな変化を実感





職場体験実習・スタッフとのつながり・コミュニケーションスキルが 8 割を超え特に役に立ったと回答

■講座プログラム （講義形式）

①就労・就学準備プログラム　　～社会人基礎力の習得～

コミュニケーション講座

パソコン講座

就活講座

ソーシャルマナー講座

グループディスカッション

模擬面接会

応募書類作成会

ビブリオバトル

②こころ・リカバリープログラム　～セルフケア・自己表現・リラックス～

認知行動療法

メンタルヘルス

アートプログラム

入門ヨーガ

③自分磨き特別講座　　～外部講師による自分力ＵＰ！講座～

オフィスカジュアルの
着こなし術講座

ボイストレーニング講座

アロマテラピー講座

英会話コーチング講座

④その他季節の講座

クリスマス会

初詣ウォーキング

振り返り会

■【インターンシップ】 述べ実施件数 120 件

自己肯定感・就労意欲の向上に大きく貢献できた。実習先は13件。

介護補助・事務補助・営業補助・バックヤード・警備（見学）・アート活動スタッフ・放課後児童デイ見守り・福祉関連イベント（運動会・音楽祭）スタッフ・ファーム活動等

◆出張型就労支援（被災地向け出張パソコン講座）

自治体や協力団体のご協力を頂きながら、宮城県社会福祉協議会、仙台市社会福祉協議会と連携し、沿岸部でニーズの多い被災圏域 12 カ所を回り、WORD・EXCEL・POWERPOINT のプログラムを実施。

今年度は開催前から地域の行政機関や支援団体、地元の方から開催についての問い合わせを頂き、殆どの地域が１０名定員枠が満席、増席となり、需要の高さが伺える反面、震災に関する就労アンケートからは震災を期に状況が変わり就労の意欲はあるが環境面にて難しい状況にある方々が多く存在し、被災圏域の就労はまだまだ課題が多いとことが伺えた。仙台市社会福祉協議会の復興公営住宅と地域のコミュニティ活性化のための「つなぐ・つながるプロジェクト（つなぷろ）」支援団体に登録され、支援団体としての実績を評価いただくことができた。

◆実績

１） 牡鹿地区（会場：大原生活センター（石巻市大原浜））

日程：7/21・7/28・8/4

参加人数：4 名（延べ参加人数 9 名）

【牡鹿会場】

２） 石巻地区①（会場：ユースサポートカレッジ石巻ＮＯＴＥ）

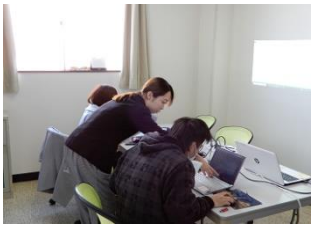
日程　①7/4・7/7・7/11・7/14・7/18・7/21・7/25

②11/7・11/14・11/17・11/21・11/24・11/28

③2/6・2/9・2/13・2/16・2/20・2/23・2/27

参加人数：①6 名（延べ参加人数 42 名）

②4 名（延べ参加人数 20 名）



③6 名（延べ参加人数 15 名）

【石巻 NOTE 会場】

【東松島会場】

３）東松島地区（会場：東松島市老人福祉センター）

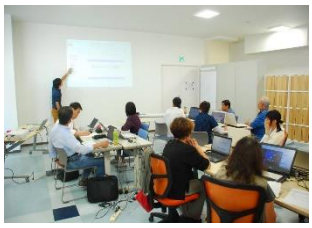
東松島市社会福祉協議会共催

日程　　１回目：8/25・9/1・9/8

参加人数：10 名（述べ参加人数 23 名）満席

２回目：3/2・3/9・3/16

参加人数：11 名（述べ参加人数 24 名）満席



【気仙沼会場】

４）気仙沼地区①（会場：スクエアシップ（気仙沼海の市２階）

気仙沼市社会福祉協議会後援

日程：9/7・9/14・9/21　　参加人数 15 名（述べ参加人数 35 名）

【多賀城会場】

５）多賀城・塩釜・七ヶ浜地区（会場：多賀城市市民サポートセンター）

日程：9/29・10/6・10/13）　　参加人数 12 名（述べ参加人数 33 名）満席

６）仙台地区（会場：福祉プラザ）仙台市社会福祉協議会中核支え合いセンター共催

日程　１回目：11/30・12/6・12/13　参加人数 14 名（述べ参加人数 29 名）満席

２回目：1/23・1/30　　参加人数 7 名（述べ参加人数 19 名）

【仙台市社協支え合いセンター主催会場】

７）気仙沼地区②　（会場：気仙沼中央公民館・スクエアシップ）

フリースペースつなぎ共催

日程：11/10・11/24・12/15

参加人数 8 名（述べ参加人数 20 名）

８）石巻地区②　（会場：市営新立野第一集会所（石巻市恵み野）

一般社団法人石巻じちれん共催

日程：1/26・2/2・2/9　　参加人数 10 名（延べ参加人数 24 名）満席

【石巻じちれん共催会場】

◆被災地の就労に関するアンケート実施

みやぎ「はたらく」応援プロジェクト　出張型パソコン講座

「就労支援の視点における震災復興アンケート調査報告書」　別紙にて報告

認定特定非営利活動法人 Switch　仙台 NOTE 統括　小関美江

◆出張型無料パソコン講座　受講者アンケート調査報告（下記簡易報告）

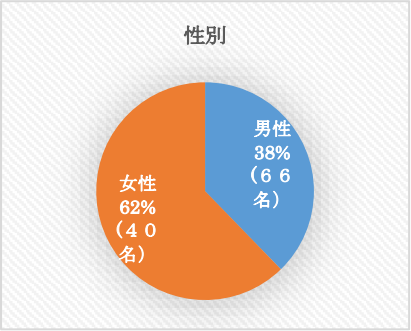
・調査目的：震災から７年が経ち、被災地における就労への意識や課題について整理する

・調査対象：講座開催地域（石巻地区・東松島地区・気仙沼地区・多賀城塩釜七ヶ浜地区・仙台地区（復興公営住宅限定）

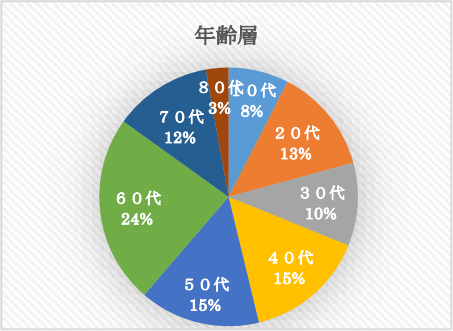
・調査期間：２０１７年７月～２０１８年３月

・調査対象：講座参加者８８名から回収（項目によっては無回答もあり）

①参加者の属性

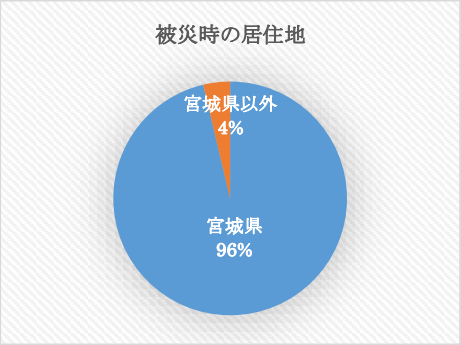


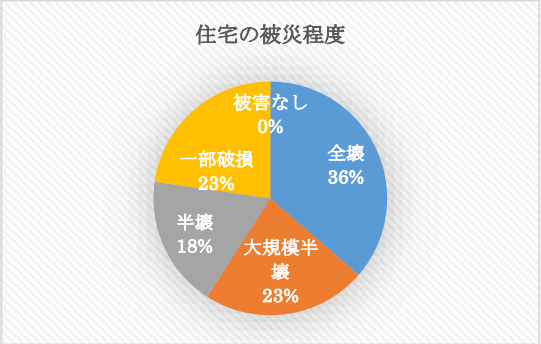
パソコンスキルをつけて再就職を目指す女性の参加が多く見られた。男性は地域参加や趣味に活かしたいという声が多く、「男性はなかなか地域のお茶会などには参加しづらいが、パソコン講座だから参加できたというお声も上がっていた。



50 代以上の参加が５４％、10 代から 40 代の若年層世代が４６％。復興公営住宅の居住者を中心に告知を行ったため、70 代以降の高齢者も多いものの、40 代以下の稼働年齢域の方も４６％となり、被災地の若年層の就労課題が顕在化したと言える。

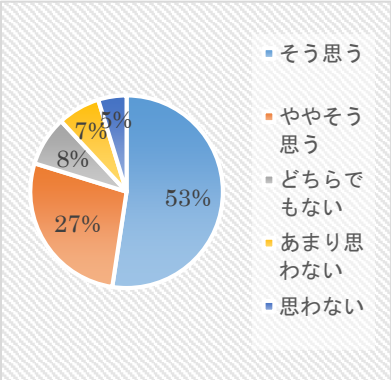
②震災時の被災状況



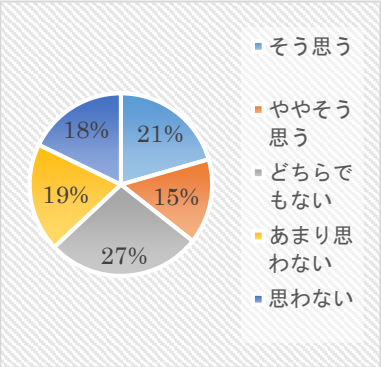


77%の方が半壊以上の被害を受けた方々であり、より被災程度の深刻な方が就労課題を抱えていることが鮮明になった。

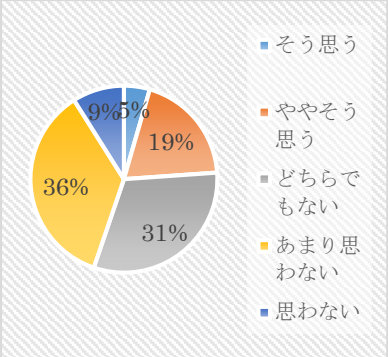
③震災をきっかけに取り巻く環境が大きく変化した



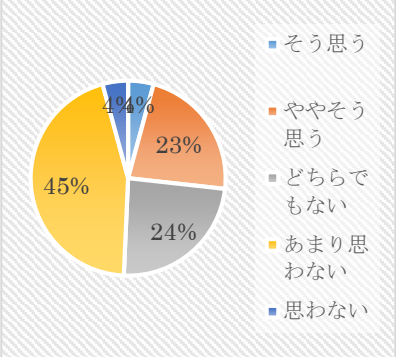
④震災をきっかけに仕事を変える必要がでてきた



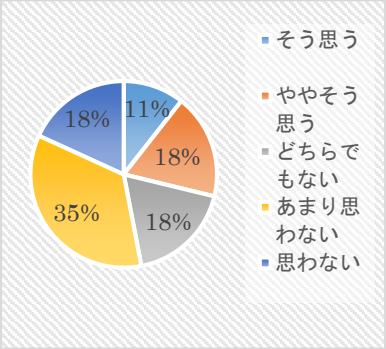
⑤地域の就職状況は改善してきている



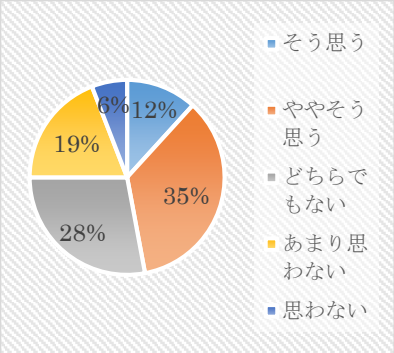
⑥地域の産業や企業を知る機会がたくさんある



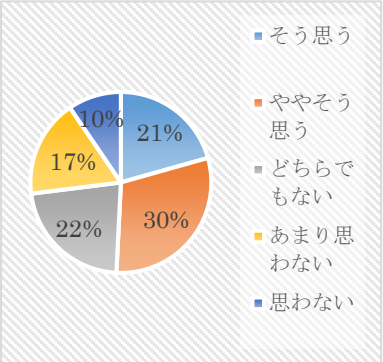
⑦機会があれば仙台や東京など他地域で仕事をしたい



⑧震災後、周囲で働くことに悩む知人が増えた



⑨震災後、周囲で不登校やひきこもりの話を聞くことが増えた



⑩働く上で課題だと思っていること（自由記載・抜粋）

【石巻地区】

・震災をきっかけに色々な面で変化した人が多いと思います。金銭的には辛い人もいますが、何より心の面で辛い人も多いと思います。働く上でも、そうした心のケアをして頂ける会社が増えればよいと思います。

・自分で明確に動かなければ状況などは変わらないと思う。色々なサポートを受け、しっかりしていく必要があると思う。働く上でストレスは必ずついてくるので、それと向き合う必要があると思う。

・資格などが何もないこと

・年齢的に体力も使わず長く働ける仕事があると良いと思う（年をとっても働きたい方はいっぱいいます）
・自分に合う仕事をみつけること
・障害者だからと言って偏見の目で見ないでほしい。その仕事内容に合ったお給料を払ってほしい。
仲間外れや差別をなくしてほしい。
・コミュニケーション
・技術面・体調

【東松島地区】
・自分への自信と踏み出す勇気
・自分自身の病気があるので企業の受け入れが心配
・家庭との両立とパソコンのスキルアップ
・高齢なので職業的に限られる
・福祉系の仕事をしながら求職活動をしている。記録なども手書きではなくパソコンを使えるようになりたい。

【気仙沼地区】
・自分をわかってくれる環境と場所、人材、信頼、協調、連動
・パソコンスキル
・人間関係
・トライアル雇用の期間について
・賃金の低さ
・障害者であること、通勤場所

【多賀城・塩釜・七ヶ浜地区】
・育児との両立
・震災からメンタル不調に。入院後現在も通院中。ストレス耐性を取り戻すことが課題

【仙台地区（復興公営住宅限定）】
・体調、メンタル面の調子を整え、長期間働くこと
・障害があり病院に通院しているため時間が自由な仕事希望だが決まらない
・パソコン操作が課題
・子供がいるので時間の制約がある
・働きたいという意欲があるものの、年齢制限の壁に阻まれることが多い

今回のアンケート調査は、復興住宅やその周辺の住民に特定し、更にパソコン講座に出てくるエネルギーのある方のアンケートが中心となったが、現在顕在化していないひきこもり層の存在を考えると、実態としては多くの方が震災後の就労やコミュニケーション等に課題を抱え、地域との接点を失いつつある可能性があることが見えてきた。

今後 Switch としては継続して仙台市と石巻市を拠点に就労・就学支援に取り組んでいくこととなるが、より地域と連携を深め地域特性に配慮した形での支援体制の構築が必要であり、今後強化していきたいと考えている。

認定特定非営利活動法人 Switch　小関・今野

●ユースサポートカレッジ石巻 NOTE

事業内容：ユースサポート事業

宮城県石巻市鋳銭場 1-9　2 階

・平成 29 年度事業概況

◈成果と今後の課題

　今年度は、学校連携に重点を置き、より早期に必要な若者、そして支援機関（学校関係者）とつながるモデル的取り組みを実施した。現場である学校関係者からは、「“今 時間をかけた対応が必要”な生徒に対して個別対応することが可能と感じる」。生徒からは「実際の経験できたこと、いろんなアドバイスが聞けて良かった」。教員からは、「学内では解決できない問題について、資源の提案・紹介は参考になった」と好評であり、在学中の地域の支え手として活動の土台を作れたといえる。

　今後、地域にある社会資源として認知の定着、活用を促進させていくことが求められる。私たちの活動を通して、地域や企業へ有機的につながっていけるよう、継続的な活動と、さらなる拡充に取り組む。

◈活動内容

（１）高校連携事業　（主な助成元：平成２９年宮城県 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業）

担当課：宮城県　環境生活部　共同参画社会推進課　NPO 協働社会推進班

（２） ユースサポート事業　（主な助成元：Ｈ２９年度みやぎ地域復興支援助成金）

担当課：宮城県震災復興・企画部　地域復興支援課

◈実績

（１） 高校連携事業

（１－１）　「いしのまき高校生『絆力』向上プロジェクト」

石巻市、東松島市、女川町など、石巻圏域の被災地域の高校生の心のケアと中退予防、地域人材育成を目的とした。モデル校 2 校（石巻北高等学校飯野川校・東松島高等学校）に定期訪問し、就学・就労相談ができる窓口（note　Café）の設置をした。Note　Café では「日常生活等を含めた相談受付」「ソーシャルスキルトレーニング講座」「履歴書作成指導、面接練習」「企業見学・実習のサポート」「VRT によるキャリアガイダンス展開」などを実施した。

訪問件数（NoteCafé 開催）59 件

相談活動件数　　134 件

・対象者の学年

　1 年生 1 名、2 年生 7 名、3 年生 7 名、4 年生 4 名（飯野川校のみ 4 年生あり）

・見学、実習実績

　A 社（農業）　見学 3 回、実習 2 回（7 名参加）

　B 社（水産系）　見学 1 回、体験 1 回（1 名参加）

　C 社（介護）見学 1 回（1 名参加）

・かかわった方の帰すう

　就職：5 名、就職未決：2 名、進学：3 名　※その他卒業年次学生ではない生徒

NOTE café

（１－２）　高校生の学外の窓口

学校内で相談できない不安や悩みを相談できる場、学校関係者が在学中から早期に地域の外部機関へ繋がりを持たせたい生徒、発達障害傾向があるグレーゾーンの生徒などを中心に、他支援機関との連携を図り、多角的に就学・就労に関する課題に対応した。一人ひとりの進路目標に合わせた活動、自分のトリセツ作成（例：得意・苦手の整理）、コミュニケーション、就活系プログラムの開催、企業インターン・見学、ボランティアの実施などを行い、地域での社会経験を通して「学ぶ」「働く」を知るという機会にした。

・高校生利用登録数：　24 名
・相談件数　：　154 件　（相談内容　就職４、進学４、不適応相談２）
・相談連携学校数　：　10 校　（石巻圏域県立高校、宮城県内通信制高校等）
・紹介経路　：　学校進路指導部長・進路指導教員、連携コーディネーター、学校養護教諭、生徒担任、家族（HP で見つけた）

・見学、インターン実施件数　：
見学２件：A 社（加工業）見学１回 １名参加、B 社（販売）見学１回 １名参加

インターン０件
・ボランティア件数：１件
・3 月末までの帰すう：
就職：2 名　　就活中：2 名　　進学（専門学校、通信制高校、通信制大学）：4 名
就労移行支援：1 名
※その他卒業年次学生ではない生徒

（１－３）　協働連携シンポジウム実施
日時：H30 年 1 月 18 日
場所：東松島市コミュニティセンター
講師：K２インターナショナルグループ　湘南・横浜若者サポートステーション　統括責任者
岩本 真実　氏
宮城県石巻北高等学校飯野川校　進路指導部長　大橋　孝幸　氏
参加人数：市内外から 25 名参加（学校等教育関係者、地域の支援機関、企業）
高校生と地域・企業との有機的な接続の必要性、石巻を面で支えるための仕組みを考える機会とした。
三陸河北新報社・石巻日々新聞社　掲載

（２）　ユースサポート事業（高校生以外）
石巻 NOTE にて、地域のユースを対象に、個別支援を実施した。主に、企業見学、実習を設定し、就職支援が中心であった。
①実人数（昨年からの引継ぎ者も含む）　：　４９名
②相談件数　　：５７５件
③依頼経路：　からころステーション、みやぎ心のケアセンター、病院（宮城クリニック、こだまホスピタル、せんだんホスピタル、いとう診療）、障害者就業・生活支援センター　コスモス、東部保健事務所、東部児童事務所、各市町健康推進課・障害福祉課、石巻 NOTE の HP

④相談内容内訳（就職、進学、その他）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
相談総件数	39	49	49	64	54	58	55	40	46	51	34	36
新規面談数	4	3	1	1	2	5	4	0	3	1	0	0
内訳（進学）	8	11	24	23	18	16	7	5	14	13	8	7
内訳（就職）	22	33	24	40	31	34	41	35	32	30	19	23
内訳（その他）	5	2	2	0	2	3	3	0	3	9	7	6

⑤企業見学　９件　１５名参加

（特定非営利活動法人にじいろクレヨン、パンセ石巻店、株式会社よつばファーム、株式会社石巻工房、幸満つる郷 KDDI エボルバ野蒜、だるまチップ工業株式会社、一般社団法人イトナブ石巻、太平ビルサービス株式会社、こども∞感ぱにー）

⑥企業実習　１９件（６社）７名参加

（特定非営利活動法人にじいろクレヨン、株式会社よつばファーム、幸満つる郷 KDDI エボルバ野蒜、太平ビルサービス株式会社、こども∞感ぱにー）

⑦就職実績：10 名

⑧連携機関：

・特定非営利活動法人 TEDIC、東松島市くらし安心サポートセンター、共生地域創造財団、パーソルテンプスタッフ株式会社　石巻サポートセンター、石巻復興支援ネットワーク　やっぺす、震災こころのケア・ネットワークみやぎ　からころステーション、石巻地域若者サポートステーション、みやぎ北石巻若者サポートステーション、一般社団法人石巻じちれん、石巻復興きずな新聞舎、日本カーシェアリング協会、東まつしま地域生活支援センター　カノン、福祉仮設住宅地域交流拠点　あがらいん、相談支援センター桜・さくら、基幹相談支援センター　くるみ、石巻地域就業・生活支援センターコスモス、みやぎ心のケアセンター、きむらの家

行政

石巻・東松島・女川地域の各 障害福祉課・保護課・健康推進課　、　宮城県教育委員会　、　ハローワーク石巻　専門援助部門・学卒部門、宮城県東部地方振興事務所、石巻市社会福祉協議会、東松島市社会福祉協議会、日本医療社会福祉協会、宮城県児童生徒の心のサポート班　、宮城県東部保健福祉事務所

（２－２）その他の活動

・出張 PC 講座　：　７月（3 名参加）・１１月（4 名参加）・２月（5 名参加）
　　各全７回１クールで実施

・石巻・開成のより処 あがらいん　ともいき農園体験　参加

・石巻復興支援ネットワーク主催　石巻市大橋仮設　夏祭りボランティア参加

ユースサポートカレッジ石巻 NOTE　小野彩香

Ⅲ　研究・研修事業

⑴各種研修

H29 年 5 月・12 月　　仙台市産業振興事業団「ジョブ・トライアル」事前研修　講師（小関）

H29 年７月　精神保健みちのくフォーラム 2017 宮城大会登壇　（田口）

H29 年 8 月　宮城県　共同参画社会推進課「すばらしいみやぎを創る協議会」研修会　講師　（今野）

H29 年 11 月　仙台市ピア相談員（ピアサポーター）雇用促進事業　講師（山下）

H29 年 12 月　平成 29 年度宮城県サービス管理責任者研修ファシリテーター（田口・山下）

H30 年 1 月　仙台市社会福祉協議会中核支え合いセンター職員研修　講師

「ひきこもり等の若者の就労支援について」（小関）

H29 年　認定 NPO 法人アスイク　支援スーパービジョン　１２回実施（対象スタッフ 3～４名）

H29 年　NPO 法人アスイク 2017 年全体研修会　「発達障害の理解と対応」　講師（小野）

H29 年　名取市　公民館学習支援員研修Ⅱ―C「発達障害について」　講師（小野）

⑵職員研修

・石巻市大川小学校を視察。石巻市立大川小学校の被災状況の視察と「小さな命の意味を考える会」佐藤和隆氏の開設を伺う。

・一般社団法人イシノマキ・ファームにて研修実施

法人の理念確認ワークショップを実施。

⑴ 学会、講演など

H29 年 6 月　社会的インパクト評価イニシアチブ　Social Impact Day 2017
「社会的インパクト評価の実践による人材育成・組織運営力強化調査」概要発表（今野）

Ｈ29 年 6 月　会津大学短期大学部　「社会的インパクト評価の普及に向けて
―実践を通じての課題と今後の展望― 」講師　（今野）

H29 年 7 月　石巻専修大学「復興ボランティア EXPO2017」講師　（今野）

H29 年 9 月　　ワーカーズコープ協働集会　分科会
「生きづらさを抱えた方々の居場所支援」　登壇（小関）

H29 年 10 月　仙台市男女共同参画推進センター　エル・ソーラ仙台
ガールズのしごと“ゆる～り”準備講座
「次へのステップ～職場体験実習等の支援について～」　（小関）

H29 年　仙台スピーカーズビューロ　仙台市民公開フォーラム　「精神障害者の就労」講師（小野）

Ⅳ　学校メンタルヘルスリテラシー教育における授業の実施

主体：みやぎこころのデザイン教育実行委員会（SCOPE）

2017 年度実施校　８校　　研修実施　２回

■4 月 17 日・9 月　東北電子専門学校　新入生対象
■7 月 15 日　　栗原市瀬峰中学校
■8 月 29 日　石巻西高等学校
■9 月 6 日　　大河原商業高校
■10 月 31 日　福島県いわき市植田南中学校
■11 月 16 日　石巻高等学校
■12 月 16 日　熊本県熊本市出水南中学校
■2 月 27 日　　大和町立鶴巣小学校

【研修実施】
■7 月 7 日　岩沼市立玉浦中学校 PTA
■2 月 11 日　　思春期・青年期自死予防セミナー

【その他】
■9 月 21 日　宮城県養護教諭部会

４月・９月東北電子専門学校

１０月３１日いわき市植田南中学校

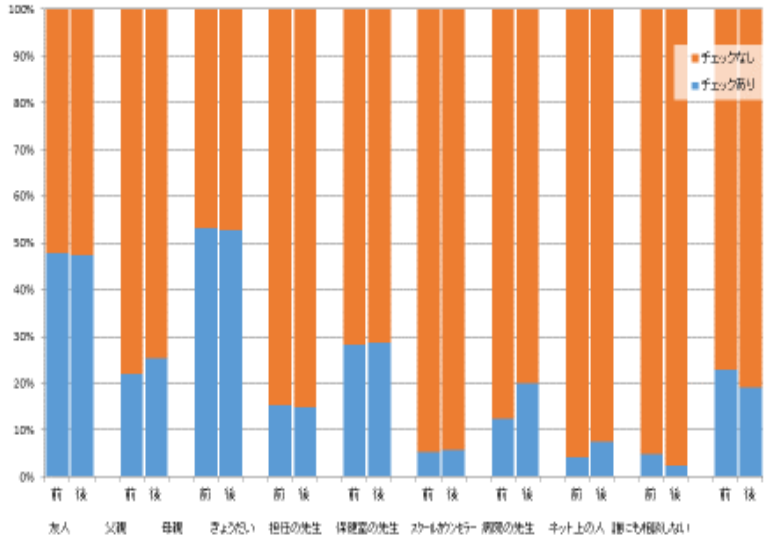
２月１１日思春期・青年期自死予防セミナー

９月２１日
宮城県養護教諭部会

１２月１６日熊本県熊本市出水南中学校

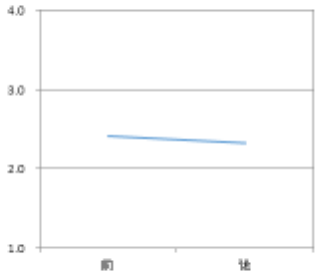
アンケート結果（抜粋）

自分ではどうにもならないくらい悩んでしまい、学校に行くのがつらくなってしまった場合、あなたは誰に相談しようと思いますか。次のうち、当てはまるものすべてにチェックをしてください。



学校の先生に相談することについての前後比較（高いほどポジティブ）

IV. 学校の先生に相談することについてあなたの考えをお答えください。	そう思わない	あまりそう思わない	少しそう思う	そう思う
1. 自分が精神的にまいっていると思ったときは、学校の先生のところに行こうと思う	1	2	3	4
1. もしわたしが今、心理的に深刻な危機に陥るようなことがあったら、学校の先生に相談することによって楽になるだろうと確信している	1	2	3	4
1. 心配したり、落胆したりする状態が長く続いたら学校の先生に相談しようと思う	1	2	3	4
1. もしかしたら将来、学校の先生に相談してみたいと思うかもしれない	1	2	3	4
1. 心理的な問題を抱えた人は、1人で問題を解決できないことも多いので、学校の先生に相談して解決することが多いだろう。	1	2	3	4



所感と今後の活動について

今年度は、仙台市内の学校からの要請がなかったものの、他県での実施（特に福島県）を実現することができた。
また一方では、小学校からの要請や相談もきており、1校実施したことで、小学校5～6年生に対しての効果が、
どのように出るかアンケートの結果から分析して、今後も積極的に実施していきたいと考える。

継続して実施の依頼がある学校が、3校ほど増えてきており、継続性という観点からも微弱ではあるが、学校側の
評価があったものと推測される。

今後の活動においての課題は、クラス単位での実施が好ましいものの、本業を持つ有志での啓発活動に限界が
あり、できれば、ファシリテーター養成講座などを確立させたうえで、学校内で継続して実施していくスタイルを
もっと普及させていく必要があり、そのための準備としてシラバスと授業案、講座の実施要綱などを構築しながら、
被災地3県もしくは広く全国へ普及啓発を発展させていきたいと考える。

年1回実施の研修においても、多様な参加者を意識しながら、県内外での普及に努めていきたい。

2018年実施予定校（2018年4月時点）
　石巻高等学校、瀬峰中学校、東北電子専門学校、福岡県中学校、岩沼市内中学校

2017年度構成メンバー

内田知宏　尚絅学院大学　准教授
佐藤利憲　福島県立医科大学　講師
伊勢　みゆき　NPO法人なまびのたねネットワーク　代表理事
相澤　治　NPO法人子どもグリーフサポートステーション　事務局長
堀内　美咲　NPO法人　仙台市精神保健福祉団体連絡協議会　精神保健福祉士
菅野　希　NPO法人ステップアップ　精神保健福祉士
加藤　大延　認定NPO法人Switch　支援スタッフ
小野　彩香　認定NPO法人Switch　常務理事
高橋　由佳　認定NPO法人Switch　理事長

SCOPE（School Outreach for Psychological Education:
（みやぎこころのデザイン教育実行委員会）

Ⅴ　その他事業

⑴ ジョブコーチ支援事業

【障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース（訪問型職場適応援助））】

平成 29 年度実績

	実対象者数	支援回数	離職者	稼働 JC
29 年度	15 名	142 回	1 名	5 名

・29 年度実対象者 15 名は、29 年度新規対象者は 6 名、継続対象者が 5 名である。(28 年度±０)

・29 年度対象者も、スイッチを利用して障害者雇用求人に採用となった方のみを対象としている。

・離職者 1 名は「年度契約満了で終了」。本人が継続を希望せずという内容である。また、2 年目フォローアップを終了した対象者も 2 名（就労継続中）出ている。

ジョブコーチ事業については、平成 28 年度は訪問型職場適応援助促進助成金という名称であったが、平成 29 年 4 月より障害者雇用安定助成金（障害者職場適応援助コース（訪問型職場適応援助）と変更された。

職場定着スキルの全スタッフへの向上や、各種事業への応用を促進するために、さらなる有資格者の増員（1 名）を図った。新たにスイッチ・イシノマキからの就職者に対してジョブコーチ支援を開始し、法人内のジョブコーチ事業として拡大を図れた。29 年度の登録稼働ジョブコーチの総数は 5 名と過去最多となったが、実際の稼働については、他事業との兼務の関係上、随時 2-3 名週 1, 2 回の稼働となった。

平成 30 年度の就労定着支援事業の新設や、雇用率拡大への対応に向け、就労定着が私たちの強みとなりえるよう取り組んだ。今後も、ジョブコーチ支援がスイッチの就労定着の強みとなるよう稼働していく。

ジョブコーチ事業担当：小野彩香

⑵ 助成事業

【　2017 年 JT　NPO 助成金事業　】

「心のコミュニティ・カレッジを通した障がい者の就労定着支援事業」

■応募背景・課題

精神障がい者、発達障がい者等の雇用支援をし、5 年間で 200 名以上の就職者を輩出している。しかし、27 年度就職者の 6 か月定着状況は障害開示者で 71%、障害非開示者は 35%と格差がある。また、宮城県の障害者雇用率は 28 年度ワースト２（1.88%）と、企業の障害者雇用への理解不足も大きい。その背景の中で実施する定着支援活動で、２つの大きな課題を感じていた。１つは在職者自身のセルフケア能力の乏しさ。２つは企業側（一般市民含む）の精神障害含む多様性への理解不足である。この課題に対し、多くの人が気軽に学び、対話できる場所がなかった。

■事業実施内容

はたサポ仙台・石巻	計２２回開催	参加者数　１７３名 サポーター参加数　２０人
シンポジウム　仙台・石巻	計　　2 回	参加者数　９４名

（有識者）運営委員会	計　　2回	
個別有料相談	4名	

・心のコミュニティカレッジ「はたサポ」を開設し、講座や交流会を通して、自身のセルフケアを学び、他者の理解も促進する場を作った。

・シンポジウム（対話型勉強会）は、雇用される側と雇用する側、一般市民を中心に、参加者同士でそれぞれの現状を知りあい、対話しながら合理的配慮とは何か、また多様性のある地域社会について考えた。

■受講者からのアンケート結果（抜粋）

〇若者当事者のフリー回答

・悩むことが多かった部分の解決策を知ることができてよかったです。自分のことを理解していけるようにしたいと思います。

・今まで、障害を抱えながら同じように働いている方達と話したことがなかったので、とてもいい刺激になり、気分転換にもなりました。

・お茶会で、多職種の様々な人と話せたのが、様々な考え、意見をいただけた貴重な時間、リラックスできる時間でした。

・意見交換する時間をもう少し欲しいと思いました。

〇支え手参加の方のフリー回答

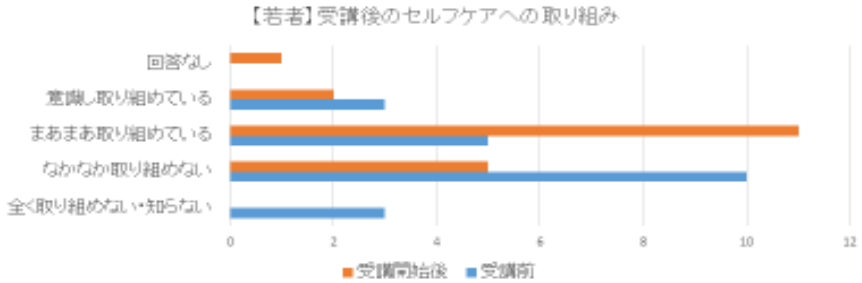
・働くことに課題を抱えている当事者との会話。メタ認知されてる方の考え方が大変参考になりました。

・様々な人が集まって自分の思っていることを自由に言える場を提供していただいてとても感謝しております。

・「楽しかった」のひと言です。「はたサポ」が私にとってのサードプレイス（家・職場以外の居場所）でした。

・異業種、幅広い年代の方とお話出来る機会を設けて頂きありがとうございました。セルフケア編で学んだことをカウンセリングに活かしていきたいと考えております。

【事後・若者】質問5　受講後のセルフケアへの取り組みについて



【事後・若者】どんなセルフケアに取り組みましたか？

・深呼吸を繰り返して、気持ちを落ち着かせる。
・考え方やみかたをかえるクセを意しきした。
・運動をするように意識した。
・本を読み、自らの病気を勉強した
・考え方のくせにより、良くとらえられる時とそうでない時があり、完全ではないと認識できた。
・教えてもらった考えを意識しながら自分でも、今の状況でも行える簡単なことから行った。

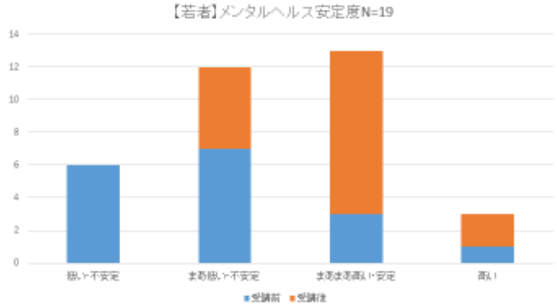
【事後・若者】セルフケアに取り組めなかった方はその理由を教えてください。

・通信制大学院のテスト前になると、焦って勉強の方を優先しがちなため。
・その時のメンタル状態などでは分かっているけど取り組めないこともあった。

【事後・若者】

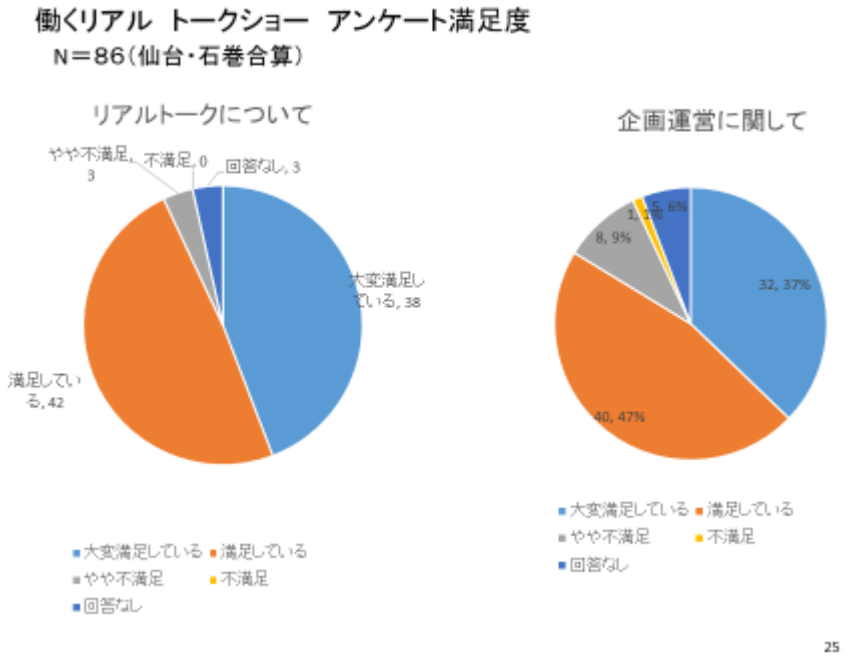
質問5-1　メンタルヘルスの安定度について教えてください

（受講前29年5月・受講後29年8月）



■　**・不安定の人の改善が大きくみられていた**
　　・受講後に下がっている人はいなかった

シンポジウムのアンケート



フリー回答について

　自由な意見が、本当に多く書かれたことに驚いた。良くも悪くも、参加者の心に響いたのだと考える。リアルを伝えることで、参加者が自分事に考え、対話を即し、理解促進に役立ったといえる。

分類すると、以下のような項目に分けられた

・当事者の話を聞けたことが良かった。参考になった。
・働き方（オープン・クローズ）を改めて考えるきっかけになった
・障害者雇用率や経済的なことなど、新しい情報に関する感想
・ピア的な感想（自分だけじゃなかったと知れた、励みになった）
・企業の話が参考になった（求める人材像、採用のポイントなど）
・残念に思ったこと（覆面であったこと、聞き取りずらかったこと、もっと聞きたかった、思ったよりリアルじゃなかった）
・覆面マスクだからこそ、皆さん正直に話してくれたと思う
・トークテーマ形式については、わかりやすいともっと自由に話してほしいという両方の意見がでた
・グループ共有に関して、あってよかったという意見

■事業実施の効果

１．在職している障がい者の職場定着
２．在職者のメンタルヘルスの健康
３．多様性理解の促進

・はたサポ（セルフケア講座＋お茶会）は、就労継続に効果があった。
・特に健康度を高く保ちながら就労継続することにも効果があった。
・はたサポは、セルフケア能力の向上、メンタルヘルスの安定に貢献できた。

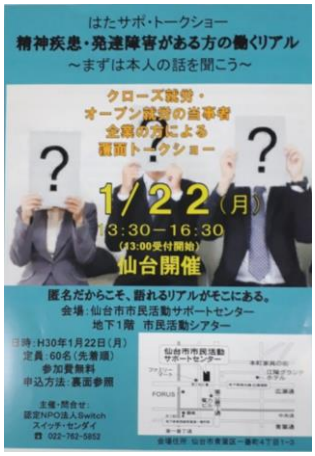
・はたサポは、対話をする場面が多く、感想からもお茶会や対話からの気づきが多かったため、対話が大きなセルフケアの向上に役立ったといえる。
・様々な立場の人が対等の立場で参加できる設定だったので、互いの理解促進に役立ち、多様性理解を促進した。
・緊急度の高い参加者はおらず、また、メンタルヘルスへの関心が非常に高い人がくる（既に通院している人、過去に通院歴のある人）ため、開催頻度はもっと低く設定しても良いと考えられる。
・精神疾患がある方や、働く悩みを持つ在職者が気軽に集まれる場はないため、場所の設定の必要性がある。
・セルフケアに関しては、より地域性が高い話題が出ると、参加者の満足感も高く、実効性も高い。

■今後の展望

在職中の精神・発達障害者の方が、支援者とも、他の障害者の方とも、気軽に対話する機会がほぼないため、そのような場（在職者コミュニティ）を継続していく必要がある。地域の定着支援機関と連携して、はたサポ開催を実施することで、新たな集客と、各地域で継続的に開催していけるようにしたい。29 年度も継続採択となっている。

〇はたサポの様子

〇シンポジウムの様子



2017 年 JT　NPO 助成金事業　今野・小野

⑶ 補助事業

宮城県自死対策強化事業補助金事業

１月２９日　自死予防セミナー実施　場所：レインボーハウスせんだい　参加人数　２６名

「身近なわたしたちができること」～早期に身近なひととつながる地域づくり～

講師：NPO 法人 Light　Ring 代表理事　石井　綾華

NPO 法人子どもグリーフサポートステーション　事務局長　相澤　治

子ども・若者の自死予防啓発セミナー

身近なわたしたちができること

「早期に身近なひととつながる地域づくり」

～みやぎ子ども・若者自死予防対策ネットワーク～

宮城県の自殺対策計画に伴う地域団体による支援活動は、継続的に行われていることで、自殺者の数は減少傾向にある一方、１０代・２０代は横ばいではあるものの若い世代にとってのこころの健康課題であることは否めない。また世界的にみても、日本だけが１０代・２０代の死因のトップは自殺であることは著しい。それらを鑑み、思春期の子どもや若者に特化した支援が必要不可欠であると同時に、地域団体が持つそれぞれの強みを活かして、子ども・若者の自死予防取り組んでいくことが今後の解決の糸口となると考える。このセミナーでは、このテーマに関心のあるすべての方々と一緒に「わたしたちができること」は何かをディスカッションしながら探っていきたいと考えます。

日　時　平成３０年１月２９日（月）
１３：００　～　１６：３０（受付１２：４０～）

場　所　エルソーラ仙台 28 階 大研修室
（仙台市青葉区中央１丁目３－1）

参加費　無料（テキスト含）

定　員　４０名

申込方法　申込書にご記入の上ＦＡＸかメールにてお申込下さい
ＦＡＸ　022-762-5853
Mail info@npo-switch.org

申込締切　平成３０年１月２４日（水）

＜セミナープログラム内容＞

講演「若者の自殺対策の現状と課題」
石井　綾華氏　NPO 法人 Light Ring 代表理事
～若者自殺対策全国ネットワークの取り組みから～
「子どものメッセージからおとながどう寄り添うか」
相澤　治氏 NPO 法人子どもグリーフサポートステーションプログラムディレクター
～子どもグリーフサポートの活動から～

グループディスカッション・ワークショップ
「子ども・若者の自死予防のために、私たちに何ができるか」
～グループディスカッション、ワークショップ～

この研修は平成２９年度宮城県自死予防強化事業補助金により実施しております。
主催　特定非営利活動法人Ｓｗｉｔｃｈ

⑷その他

その他

【研究協力】

・文部科学省若手研究（B)「日本版 IPS／援助付き雇用フィデリティ尺度の検証とフィデリティ評価システムの構築」

・障害者対策総合研究開発事業＜精神分野＞「オリジナルソフトによる認知機能リハビリテーションと援助付き雇用を組み合わせた精神障害者の就労や職場定着の支援の効果の検証と普及方法の開発」

・「自閉スペクトトラム症患者に対するオリジナルソフトを用いた認知機能リハビリテーションの効果検討」

・「効果的な就労支援のための就労支援機関と精神科医療機関等の情報共有に関する研究」

【実習等】

・仙台市教育委員会　東華中学校　職場体験実習　2 名受け入れ

・精神保健福祉士実習

　東北文化学園大学 4 年 2 名、東北福祉大学 4 年 1 名　受け入れ

・内閣府「社会的インパクト評価の実践による人材育成・組織運営力強化調査」事業参加

【大学生インターンシップ】

H29 年 8 月　　仙台白百合女子大学心理福祉学科 2 年生　1 名受入

H29 年 9 月　　明治学院大学 2 年生　1 名受入

30 年度計画

⑸メディア等掲載

■2017 年 5 月 15 日

キャリアコンサルティング協議会　マンスリーコラム 5 月号　掲載　理事　小関美江

2017年5月号

■未来を担う若者を支え、温かく応援できる存在でありたい

人は誰もがかけがえのない自分だけの宝物を持っている

「はたらきたい」「でも自分には何の取り柄もない・・・」

この思いの狭間で揺れ続けながら、動き出せずにいる方は少なくないと思います。

でも、全ての人には、必ずストレングス（強み）があります。

100 人いたら 100 人が違う才能を持っていて、それはその方だけのかけがえのない宝物だと思っています。

自信がない方、不安を持っている方は、無敵な宝物を持っていても、そこに気づいていない、または思い出せなくなってしまっている方が殆どです。

私はそういった方々に寄り添って、その方の魅力を見つけ、強みを引き出すためのお手伝いをしています。

良いところを見つけたら、どんどん伝えて行きます。自分の良いところを探し、受容することで、自分自身を取り戻すきっかけになり、リカバリーを遂げていく方をたくさん見てきたからです。

この「宝物探し」は、自己肯定感への支援としても私がとても大切にしているものです。

■若者を社会で支える視点を持ち、無限の可能性を応援する

私は現在、NPO法人にて困難を抱えた若年層の就労支援に携わっています。

一緒に将来について考えたり、できることややりたいことを探したりなど、気持ちに寄り添いながら、自分らしい仕事を見つけるためのお手伝いをしています。

そのための環境調整として、大学や高校、支援機関等と連携して就労や復学についての相談を行ったり、地元企業へのインターンシップを紹介するなどして、はたらく経験の少ない若者を働く場に繋いでいます。マッチングに合わせて、時には企業開拓も行います。雇用構造の変容に伴い、既存の就活に乗れない方々が、もっとオルタナティブに就活をする場があっても良いのではないか、そんな思いで、日々模索しながら、挑戦を続けています。

相談に来る方は、過去に不登校やひきこもりを経験していたり、一度就職はしたけれど周りとの関わりが上手くいかず仕事に行けなくなってしまったり、仕事が覚えられず自分に何ができるのか分からなくなってしまったりなど、様々な悩みを抱えていますが、その背景には、精神疾患や発達の課題、生活困窮に関する課題、家族の就労問題、被災地特有の生活課題など、現代の社会的背景にある課題を抱えていらっしゃるケースが殆どです。ですので、単なるワークキャリアへのアプローチではなく、本質的な課題や環境調整も含めた包括的なアプローチが必要であり、そのためにキャリアコンサルタントは適切な社会資源を把握し、多分野の支援者と連携して主体的に動く、ソーシャルワーク的な動きが必要となります。

又キャリアとメンタルの問題は切り離せない部分であり、課題を抱えた相談者が前を向いて問題に立ち向かうには、支援者の温かい承認が何よりも必要であると感じています。ですので、私自身相談者とのラポール形成をとても大事にしています。

無条件に温かく受容し、共感的理解を持って、根気強く、こころの声を聴く。

キャリアの勉強で一番初めに学んだ傾聴の基本が、表面だけでは見えない真の問題を把握し、解決の糸口が掴める武器であると、改めて感じています。

日々勉強の連続ですが、若者が体験を通して自身のストレングスを見つけ、困難を乗り越え自分の力で変わっていく姿は本当に尊しく、その無限の可能性に力を頂いています。そしてそのために環境を整えきっかけを作ることが大人の役割だと思っています。

これからも未来を担う若者を社会で支えていくという視点を持ちながら、温かく応援できる存在でありたいと思っています。

■私の凸凹キャリアを振り返って今見えてきたもの

最後に私自身のキャリアについても触れたいと思います。

新卒入社でIT企業の営業職に始まり、ウェディングプランナー、教育関連企業の営業職・キャリアカウンセラー、そして現職。その中で、今思えば転職だったと思われることが二つあります。

一つ目は、新卒で 10 年勤めた会社を辞めた時。

転勤で地元仙台に戻り、仕事もプライベートもうまく行かなくなって、給与詐欺る選択をしたけれども、アイデンティティの喪失感で自分の生き方を見失ってしまったとき。この時人生を仕切り直しとばかりに徹底的に自己分析を行い、少しでも興味を持った職業や会社があれば直接足を運び自分の目で確かめ、はたらくことに徹底的に向き合った経験が、数年後の仕事に繋がり、今の仕事の基盤となっています。

二つ目は、出産。

長女を出産したときは仕事が絶好調の時期。そのまま育休を経て営業職で復帰しましたが結果を出せず、保育園のお迎えの帰りに涙をだっこして泣きながら帰る日も度々。ただこのとき上司に社員研修の役割を頂き、これがハマったことで社内に自分の居場所を見つけることができ、この経験が後に講師の仕事に繋がることになりました。

この二つの出来事は予期せぬ出来事ではありましたが、どちらも結果的に今の仕事に繋がっており、これこそブランドハップンスタンスセオリーそのものだと思っています。

また、仕事と育児とのバランスがとれず余裕がなくなったとき、ライフキャリアレインボーを心に描きます。社会や家庭で様々な役割の経験を積み重ねてキャリアが形成されるというこの概念は、ワーククキャリアにばかり執着していた私が、これでいいんだ、と人生をライフキャリアの視点で捉え、多様な役割が今後より支援の幅を広くすると気づかせてくれたものです。

そう考えると、人のためにと始めたキャリアの勉強も、自分自身の人生を励まし勇気を与えてくれるものになっていることに驚かされます。また山あり谷ありだった私の凸凹キャリアも、気づけば一本の道に繋がっていて、共通しているのは「人に喜んで頂き、笑顔が見ることができる仕事」。その軸と経験が私のストレングスであるように思います。

多様な役割から得られるしなやかな視点を支援に活かしながら、仕事を通して幸せになる人を一人でも多く増やしていけるよう、若者が夢を持って働ける社会作りのお役にたてるよう、これからも日々学び成長して行きたいと思います。

小関 美江（こせき みえ）

大学卒業後、大学IT企業、婚礼企業を経て、人材教育企業にてキャリア支援・社員研修に従事。行政のキャリアカウンセリングや大学講義、現在NPO法人にて就労・就学に困難を抱えた若年層の支援に携わる。

認定NPO法人Switch　理事・仙台NOTE統括ディレクター

【資格】

2 級キャリアコンサルティング技能士

国家資格キャリアコンサルタント

産業カウンセラー

■2017 年 5 月 21 日

石巻かほく新聞　掲載　「働くをサポートする講座『心を整える』メンタル術編」

職場での悩み解決へ メンタルヘルス講座

石巻 来月から5回開催

「はたらくをサポートする講座『心を整える』メンタル術編」（NPO法人Switch主催）が、6月9日から計5回にわたり、石巻市鋳銭場の石巻NOTEで開かれる。メンタルヘルスの管理方法を学ぶ。日程は6月9日、23日、7月7日、21日、8月4日。時間はいずれも午後6時半～8時半。

40歳までの在職者で、働く悩みがある人や従業員のメンタルヘルス管理に携わる人が対象。申込用紙に必要事項を記入し、ファクスで申し込む。定員になり次第締め切る。受講無料。

連絡先と申込先は、NPO法人Switch 022（762）5851。ファクス022（762）5853。

天気

きょうは北西の風、日中は南東の風、晴れ。最低気温13度、最高気温30度。波高1㍍。あすは南東の風、晴れ。波高1㍍。

あすの潮汐

22日（月）＝中潮

鮎川	
満潮（高）	干潮（低）
0:36（11）	7:01（-55）
13:00（-2）	18:48（-53）
日出 4:18	日入18:44

あさっての潮汐

23日（火）＝中潮

鮎川	
満潮（高）	干潮（低）
1:11（16）	7:46（-74）
14:08（9）	19:42（-48）
日出 4:17	日入18:45

■2017 年 6 月 16 日

河北新報　掲載　「JT　NPO 助成　交付式」

地域活性化支援
東北5団体助成
JT、仙台で交付式

日本たばこ産業（JT）は地域活性化などに取り組む東北のNPO5団体への助成を決め、仙台市若林区の東北支社で14日、宮城、山形両県の計3団体に交付書を送った。

交付式では障害者の就労定着支援事業などのSwitch（仙台市宮城野区）の今野純太郎事務局長が交付書を受け取った。助成金は約150万円。仙台、石巻両市でメンタルケアを支援するセミナー開催費用などに充てる。

東北の他の助成団体は次の通り。

▽もりおかユースポート（盛岡市）▽故郷まちづくりナイン・タウン（登米市）▽鶴岡災害ボランティアネットワーク（鶴岡市）▽キャリア・デザイナーズ（郡山市）

交付書を手にする今野事務局長（左）とJT東北支社の飯塚武典副支社長

■2017 年 6 月 16 日

Forbes　JAPAN　掲載　「次世代型寄付先カタログ 30」

認定特定非営利活動法人 Switch　3 8

YUKA TAKAHASHI

高橋由佳
理事長

事業内容　すべての人々が自分らしい生き方を取り戻し活気ある社会を築くことを目指す。障がい福祉サービス事業所の運営、就労支援等の学生支援事業や石巻の若者への中間就労支援、メンタルヘルス研修・研究事業を運営。2011年に設立。

メンタルに困難を抱える若者の就労支援に精力的に取り組む、仙台を拠点とするNPO。石巻でも就労困難な若者を支援。社会的インパクト評価も自ら実施する。理事長は、元レーサーという異色の経歴の持ち主（塚本）。

■2017 年 9 月 8 日

石巻日日新聞　掲載　「誰もが地域で安心して学び・働き続けられる社会へ」

誰もが地域で安心して学び・働き続けられる社会へ

認定NPO法人 Switch（スイッチ）

石巻駅から徒歩1分の所に、私たちの2つの活動拠点「石巻NOTE」と「スイッチ・イシノマキ」があります。石巻NOTEはさまざまな困難を抱えた高校生、大学生を中心に30代までの若者の就学・就労支援を行っています。

本年度は通所に加えて石巻圏域の2高校をモデル校とし、校内で週1回程度「NOTEカフェ」を開き、進路相談やコミュニケーションスキル、職場体験のサポートなどを展開しています。

スイッチ・イシノマキは、通所施設の障害福祉サービス事業所であり、主に18歳以上の精神疾患を患った方や発達障害の方への支援を行っています。生活訓練を生かし、疾患の自己管理やリズムを整えるという基本目的のほかにも、休学中や休職中の方の支援など幅広い目的で皆さんがいらしています。

2つの拠点の共通点は、困難に直面した経験がありながらも、もう一度自分自身に挑戦しようという方々が通っていることです。どんな状況でも、自分のためにできることはあり、それを一緒に探していきます。そして自分を見つめ、地域のイベント参加や企業見学、職場実習活動、バイターン（有期雇用アルバイト）を通して一歩ずつ自信をつけ、未来を切り開いていきます。

「私は高校でうまくいかなかったり、そのあと病気にもなったりで大変でした。でも今働いて思うことは、自分らしく働いていると毎日が幸せだということです」。これは私たちがかかわった方が、これから就労を目指す人たちに向けて話した言葉です。私たちはこの中の「自分らしく」が最大のポイントと考えています。

「自分らしく」学び 働き続けられる石巻を目指して

私たちの支援方法の軸に、ストレングスモデルがあります。「自分らしさを活かす」と解釈しています。多くの困難を体験すると、できないことに目が向き、一歩を踏み出す勇気が持てなくなります。

地域交流講座：開成団地の農園にて、収穫祭に自由参加。農業に魅力を感じる若者は多い

困難があっても、自分らしさを大切に進める人と、そうでない人の差はなんでしょうか。私たちは「支える人」の存在が大きく影響すると考えています。自信を失った若者は、人との関わりも失いがちであり、そのためにも所属や在籍に関係なく、関わり続けられる「ワンストップサービス」の仕組みが必要であると考えます。

支え合って成長へ

雇用のミスマッチという課題の要因の一つに、互いを理解しあう難しさがあると思えます。しかし、理解しあうための対話をサポートする仕組みも不十分であると感じます。私たちが出会う若者は住み慣れた地域で安心して働き、暮らしていきたいと願っています。

互いが安心して働けるようになれば、得意を発揮し、不得意をサポートしあう存在に成長していくのです。私たちは、会社や地域につないでいく中で、対話に重点を置きながらその関係づくりを支えていきます。

職場実習（インターン）：それぞれの興味関心に合わせ、地元企業にご協力頂いている

石巻で事業を始めて5年が過ぎ、学校の先生方、地域の皆さん、企業の皆さんの熱いハートと温かいつながりを感じています。「豊かな人」。それが石巻の最大の魅力であると感じ、今後も広げていきたいと考えています。

文責：認定NPO法人Switch
常務理事　石巻統括マネージャー
小野彩香

問い合わせ
ユースサポートカレッジ
石巻NOTE
石巻市鋳銭場8-23-3階
☎022-253-5374
スイッチ・イシノマキ
石巻市鋳銭場4-16
☎24-6511
switch-sendai.org

理事長

高橋 由佳（53）

宮城県仙台市出身。二輪メーカーにてモータースポーツ企画運営、自身もレースに参戦。その後、教育・福祉分野の専門職を経て、2013年に、就労・就学支援に特化したNPO法人Switchを設立。精神保健福祉士・産業カウンセラー

団体からみた地域課題

雇用のミスマッチ

▼

解決方法

「自分らしさ」の保障と、伴走型で対話促進

NPO日和とは

石巻市内で震災の被災者支援や復興支援などに携わってきた約70のNPOとボランティア団体により組織された「石巻市NPO連絡会議」の所属団体が取り組みや理念を伝えるコーナーです。

■2017 年 12 月 20 日

石巻日日新聞　掲載　「いしのまき高校生「絆力」シンポジウム」

絆力向上シンポジウム

協働連携で脱ニート社会へ

在学中からのサポート重要

事例紹介のとともに教育機関との連携の重要性を説いた岩本さん

■2018 年 2 月 26 日

平成 29 年度内閣府主催　働く広場公開座談会　精神障害者雇用は今！（H29 年 12 月 7 日開催・常務理事小野パネリスト参加）が働く広場 2018 年 3 月号に掲載されました

障害者と雇用

働く広場

2018/3 No.486

職場ルポ 営業の仕事を障害者たちがサポート サラヤ株式会社（大阪府）

グラビア「里枝子の窓」ただいま放送中
広沢里枝子さん　信越放送 ラジオパーソナリティ（長野県）

公開座談会 精神障害者雇用は今！
～事例から考える精神障害者の職場定着～

精神障害者雇用入門 精神障害者雇用の進め方

「動物園の病院長さんになって夢にエサをやりたいな」 長野県南 宮崎 誠さん

独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構
誰もが職業を通じて社会参加できる「共生社会」を目指しています

3月号

平成 29 年度内閣府主催 障害者週間連続セミナー

精神障害者雇用は今！

～事例から考える精神障害者の職場定着～

「働く広場」公開座談会

この座談会は、2017（平成29）年12月7日（木）、有楽町朝日ホール（スクエア）で開催された「働く広場」公開座談会の模様です。

宮崎哲治さん

宮崎　神奈川障害者職業センター所長の宮崎です。2013年4月からの精神障害者雇用義務化に向けて、いちばんのポイントとなることは何でしょうか。それは、企業のみなさまに精神障害のある方を雇用してよかったと思っていただくことにも、精神障害のある方ご本人にも生きがい・働きがいを感じていただけるような長期の就労を実現することです。そこで、本日は職場定着」をテーマに座談会を進めていきたいと思います。

近年、ハローワークにおける精神障害者の職業紹介状況は右肩上がりに推移されています。一方で、職場定着状況については、ほかの障害がある方々と比べて厳しい状況であることが受けられます。職場定着に課題のある方々は、どうすれば長期の就労が可能となるのでしょうか。この座談会では、そういったところについても、掘り下げていきたいと思います。

それでは、各パネリストのみなさまから、自己紹介を兼ねて、それぞれが行っている取組みについてご紹介いただきたいと思います。

宮崎　まず、大企業を代表して、株式会社イオンファンタジー人事総務本部人事グループジョブサポートマネジャーの岡真三さんからお話しいただきます。

岡　当社は、イオングループでショッピングセンター内のアミューズメント施設を運営しています。人員は正社員、契約社員、パート・アルバイトで総勢5435人、内パート・アルバイト4955人（2017年6月1日現在）国内で、全体の91・2%を占めています。

当社の2017年6月の障害者雇用率は2・36%と、法定雇用率の2%を超えています。とはいえ、昨年は1・78%で、昨年は1・49%ちょっと、これまで決して順調というわけではありませんでした。雇用している障害者は、店舗で56人、本社で42人います。今年度は、業務分担やサポートがしやすい環境にあり、定着強化に効果的と思われる本社での雇用を拡張しています。

現在、5人に1人の割合で障害者が働いています。障害種別では、身体障害者が7人、知的障害者が2人、精神障害者が33人、発達障害者が4人。知的障害者・精神障害者保健福祉手帳の有効期限が切れる前に、ご本人が自分の人生を自分で決められるよう、障害者雇用支援センターの方々に、ご本人の就労後の生活面のサポートを行っています。また、ご本人が当事業所を自主的に利用し、一つの支援モデルとなっています。

現在、当事業所には1年に40～50人位の方が新規に登録し、40人位の方が就職します。そのなかで、精神障害を開示して働く方の1年定着率はおよそ60%です。定着支援のなかで、いちばん手厚い支援といわれるジョブコーチ支援を利用した方は、より定着のパーセントは高い状況です。

私たちは、精神障害のある方の職場定着には、ご本人に安心して働いていただくことがとても大切であると考えております。一つの支援コンサルタントとしています。安心していただくのに必要なことは何か、それは、「納得感」「有能感」「信頼感」の3つです。私たちのほうから何かをやってもらうというようなサポートする支援側から、認定NPO法人Switch の小野彩香さんにお話いただきます。

小野　本日は、障害福祉サービスの就労移行支援事業所の一つであるスイッチ・センダイ」の取組みについてお話しさせていただきます。

―スイッチ・センダイ」は、精神障害のある方の支援に特化した事業所です。就労を目指す方はもちろんのこと、ご本人が自分の人生を自分で決められるよう、

公開座談会

小野容香さん

ルについてのお話があり、職場定着のポイントであることがわかります。その効果や、工夫点などについてお聞かせください。

岡　取後認知症や目盛などを表現にわたり見ていくと、睡眠時間の減少など細かい変化に気づくことができます。逆に言葉がなかなか出てこない方もいますが、そういう方も目盛であれば気持ちを自己発信してください。

成功させるための工夫ポイントとしては、強制しないこと、その点も配慮しています。

小野　イキシファンタジーさんは大企業としての規模感を活かし、システムとしてバッターをされています。一方、起工会さんは中小企業の利点を活かし、同僚や先輩といった気軽な人間関係のなかで安心づくりを行い、素早く変化をキャッチされています。双方に共通するポイントは、障害のある方が安心できる環境があることです。

一方、今後工夫が必要だと思うことは、働き続けるなかで、「ほかの社員の方はこんなに働いているのに、自分はあまり働けていない。役に立たないのではないか」という気持ちになってしまう障害のある方への対応です。その気持ちが、日常の動作や睡眠の変化に表れたとき、会社のこととして話し合えることが大切だと思います。

宮崎　障害のある方の周知に対して、会社側も真剣に向き合う姿勢が大切だと思います。これについては、どのようにかかわっていけばいいのでしょうか。

田中　たしかに、会社の風土という大事だと思います。当社も、多様な障害のある方をはじめ相談員みんなが納得できるよう、就業規則を見直す機会をつくりました。最初に理念を書き出し、それぞれの規則が何のためにあるのか、何について決められているのか、細かいところを社労士さんと相談しながら決めていったのです。

私は、立場的に強社を指摘する機会があります。そうすると、「あの会社では働きたくないな」と思うお社も少なくありません。ですから、私たちは、「自分たちが『ここで働きたい』と思える会社にしていこう」と、つねづね話しています。

障害者同士でも互いに理解が必要

宮崎　さて、この座談会では、事前に来場者の方からの質問を受付ついてきました。ここで、小林さんへの質問を一つご紹介します。

「Q.こういうことをされたら嫌だな、こんな人がいたら嫌だな、と思うことがあれば教えてください」

小林　嫌な人、嫌なことがあっても、職場必要に対応していくしかないと思います。後の中には、いろいろな人がいますから。

私の場合、障害のある方で、多少そりの合わない方がいたのですが、だんだん話し合うようになっていきました。障害者同士でも、互いに理解し合う姿勢が必要なのだと思います。

宮崎　企業内で、社員同士の人間関係づくりで気をつけていることは何でしょう。

岡　当社の場合、本社全体で約4人、ジョブサポートでは29人の障害のある方が働いているのですが、一人で接客全体を運かく把握するのはなかなかたいへんです。そこで、ジョブサポートの障害者メンバーのなかで、リーダー的存在の方を4人ほど決めて、他部署から頼まれた仕事をメンバーに共有したり、困っているメンバーがいたら助けたりといった役割をになってもらっています。

こうした体制のなかで、私自身が障害者メンバーにとても支えられています。日誌にも、「今日の目標が達成できましたか」、「今日もよい一日でした」といったことが書かれているのを読み、心が洗われる想いです。他部署の上長からも、「あの人よくがんばっているね」、「いい人を配属してくれてありがとう」とよく声をかけられます。

宮崎　別の質問に変わりますが、精神障害のある方の職場定着のために、企業や本人のサポートに加え、医療関、特に医療機関との連携が必要ですが、支援機関ではどんな取組みがあります。

小野　医療機関との連携は、就労支援機関がになえる大きな役割の一つです。実際に、多くの就労支援機関は本人の診断に同席させていただきます。そこで、いま行っていることや今後の就職活動における注意点、不調になったときの対処法などについて、主治医の先生と3人で話し合うのです。また、就労後は、こちらから主治医に情報提供していることなどを報告し、相談することもあります。

企業からは、よくご本人様を主治医にとり取りできないか、という相談を受けることがあります。気持ちはわかりますが、現実的にはむずかしいです。必ずご本人の前で直接について確認し、助言をいただくようにしています。

担当部署だけでなく会社全体で取り組むために

宮崎　続きまして、来場者の方々から直接質問を受けつけたいと思います。

宮田　私が勤務している会社では、まだ精神障害のある方の雇用は行っていないのですが、今後の法定雇用率の引き上げとともに対応を検討しているところです。しかし、一つの部署でやろうとしても、うまく回らないと思っています。

そこで、パネリストの方に聞きたいのですが、他部署の方の理解を深める秘訣は何かお行っていますか。

岡　当社では、障害のある方にはまずジョブサポートで仕事に慣れていただいてから担当部署に配属し、長く働いていただくようにしています。

ですから、他部署の方々にも、必ず障害のことを理解していただかなくてはなりません。

具体的には、定着面談で明らかになった課題を該当部署の上長と共有するようにしています。また、障害のことを理解していただくために、管理職向けのセミナーを開催したいと思っています。

宮田　ぜひ、ご活用ください。

企業と就労支援機関が連携して障害者を支える

宮崎　最後に、パネリストのみなさんから、一言ずつ感想や補足説明をいただきます。

岡　障害者の採用や定着について、一人で解決するのはむずかしいと実感しています。就労支援機関やハローワークなど、さまざまな機関と連携して進めるのがよいでしょう。

また、どんな取組みを進めるにしても、他子とのコミュニケーションが何より重要となります。ですから、これからも、障害者メンバーの指導を自己発信しやすい環境づくりを心がけていきたいです。

田中　最後となりますので、当社の取り組みについてお話しさせていただきます。私は、ハンディの有無にかかわらず、実習の場・体験の場が絶対に必要だと思います。特にハンディのある方にとっては重要なことです。企業が「できない」「忙しい」と言い訳せず、行動することが、社員の人生を大事にすることにつながるのではないでしょうか。

宮崎　「就労困難者」という言葉がありますが、何とは、普通職場に通っていた方が18歳で就職を出て、住まいを探し、就職するのですが、定着できず辞めてしまう方が多いと聞きます。それは、実習経験がないために、なかなかうまくマッチングできないことが原因の一つです。

私たちの中小企業は、このような就労困難者の方々にも実習の機会を提供し、マッチングの可能性を高めるべきなのではないでしょうか。私たちにできることがあれば、ぜひ、ご活用ください。

小林　これからも、自分に負けることなく、なんとかやっていきたいです。とにかく続けること。それがいちばん大事なことだと思いますので、引続き精一杯がんばりたい。

小野　2018年から、就労移行支援事業のなかに新しいサービスがつくられます。それは、就労定着支援事業です。厚労の資料には、国が定着をフォローする旨が書かれています。加えて、これまで就労移行支援の一環としてやっていたことを、きちんと制度として枠組みを設けてやっていかなければいけないという絶縁が出されたのではないかと思います。

これから、新しく事業ができることで、みなさまの集域にも支援の機会が増えるはずです。ぜひ、一緒に地域中小企業の方々と、共に考え、共に学び、共に成長していきましょう。

土井　企業のみなさまにおかれましては、企業の方だけで課題を抱え込むのではなく、ぜひ関係機関をうまく活用しながら障害者雇用を進めていただきたいと思います。

そして、障害のある方が安心して、よい働きとなれるよう支えていただけたら幸いです。

2018年4月からの新しい障害者雇用に向けて

宮崎　2018年から精神障害者が法定雇用率の枠組みに入ってきます。障害のある方々は、みなさまと一緒に働くことで、経済面に自立できるということだけでなく、生きがい・働きがいをうって目標をたてながらがんばることができるのです。また、社会に参加し貢献しているのだという安心感・満足感にもつながります。さらには、働き続けることで、生活リズムも安定し、余暇とのバランスも整えられ、もっとがんばろうという意欲も湧き出てくるはずです。

こうしたことを考えると、企業のみなさまには、障害のある方々を単に雇うだけでなく、職場のなかでさらにがんばっていただけるような受入れ体制をつくっていただきたいと思います。また、そこで力をどんどん発揮し、成長し、定着できる障害のある方が増えることは、世の中全体を豊かにし、社会へと導くのではないでしょうか。本日は誠にありがとうございました。

小林義一さん

担当者は思うようにやってみなさい」と、社長の私が思い切って伝えることで、成功の可能性は高まるのです。

第3のポイントは、障害種別ではなく、個々の持ち味を知ることです。同じ精神障害の方でも、それぞれ応援すべきところは異なります。だからこそ、実習や面接を必ずやっていただきたいのです。

また、「新卒しつつ、無理しすぎずに頑張ること」もポイントの一つ。例えば、当社で働くなかで特殊なプログラムを組むことができる精神障害のある方がいます。その方が休みの日に、どうしても必要となり、会社に来ていただいたことがあります。後は、「頑張っていただいてありがとうございます」といってくれました。期待ばかりで無理のポジションを与えてしまうと、その方が休みを取りにくくなってしまいますが、過度に期待することは、その方の元気につながるのです。

職場に続ける立場となり仕事を続ける自信を得る

宮崎　続きまして、先ほど田中さんからもご紹介がありましたが、有限会社起工会で働いて10年目を迎える小林さんにお話しいただきます。

小林　私はいま60歳なのですが、最初に病気になったのは30年前、25歳のときでした。以来、ずっと薬を服用しており、副作用でフラついてしまうこともあります。それでも、いままでなんとかやってきています。そこで、ずっと内装の仕事をしていました。工期の終わりが近づくと残業が多くなり、きついと感じることも多かったです。退職後は1年くらい貯金生活に入れましたが、現在の勤務時間は、週4日勤務の午前8時半から午後3時の5時間半で、1時間の休憩があり、無理なく働けています。低日の生活リズムが整っていて調子よく、むしろ体み明けのほうが体みを取りにくくなってしまいます。

社内の雰囲気はよく、社員の方々も理解のある方ばかりで、いつも気軽に話しかけてくださいます。入社当初は、先輩方に丁寧に仕事を教えていただきました。現在は、代わりの方が体みを取りやすくなってしまいます。

仕組みづくりを重視したジョブコーチ支援を実践

宮崎　企業が行う職場定着に関する取組み、また、そこで働く小林さんのお話をふまえ、支援機関のお立場から伺ってまいりたいと思います。

土井　特に心に残ったのは、小林さんのお話です。小林さんのような当事者のご活躍が、後に続く方にとってのよいロールモデルになるのだと思いました。

また、企業2社からうかがった実例を経てジョブマッチングしたうえで働くこと、障害者ご本人の特性に合った働き方を検討すること、そして、必要に応じて他機関を利用したフォローアップ体制があること、職場定着に必要なことは、この3つに尽きるのではないでしょうか。

南センターでは、障害のある方との面談を中心としたジョブコーチ支援や、事業所の雇用管理をサポートするジョブコーチ支援を提案しています。その背景には、障害のある方のセルフマネジメントスキルの向上の力を高めること、また、事業所の雇用管理の仕組みやフォロー体制をつくることが大切であるという考えがあります。

精神障害のある方の雇用に関しては、ご本人が安心して働けて、企業の方も安心して働かせることのできる仕組みづくりの重要性が身に染みてです。その仕組みづくりの一環として、私たちは「ナビゲーションブック」を推進しています。ナビゲーションブックは、ご本人と当センターとでご本人の強みや、ストレス対処の方を高めること、また、事業所の雇用管理の仕組みやフォロー体制をつくることが大切であるという考えがあります。

精神障害のある方の雇用に関しては、ご本人が安心して働けて、企業の方も安心して働かせることのできる仕組みづくりの重要性が身に染みてです。その仕組みづくりの一環として、私たちは「ナビゲーションブック」を推進しています。ナビゲーションブックは、ご本人と当センターとでご本人の強みや、ストレス対処の方を高めること、また、事業所の雇用管理の仕組みやフォロー体制をつくることが大切であるという考えがあります。

後天、症状を引き起こすきっかけ、その対処法や配慮をお願いしたいことなどをまとめたものです。事業所にお渡しし、その内容を共有します。そのほか、業務日誌や定期面談、集団管理シートなどを活用するのも効果的です。こうしたものとしたことに取り組むことで、事業所とご本人とのコミュニケーションが取りやすくなり、双方の理解が深められます。

職場定着に必要となる工夫すべき点とその効果

宮崎　先ほどから、ナビゲーションブックや取後関係、目盛などを、障害のある方が自分のことを他者に説明する効果的な調査会を行うことも可能で

岡直三さん

いらっしゃいますか。

岡　当社では、障害のある方には

■2018 年 3 月 29 日

働く広場 2018 年 4 月号「NOTE　Vol.1　支援の重要性について」を常務理事小野が執筆しました。

働く障害者をみんなで支えるために　Vol.1　NOTE

「支援」の重要性について

障害者雇用においては「支援」が重要な役割を果たしています。しかし職場では、具体的に「だれが、どのように支援していけばよいのかわからない」といった課題も見受けられます。今シリーズでは、「支援」について考えてみます。

認定NPO法人Switch　常務理事　小野彩香

『支援』とは何でしょうか？

支援とは、「支えること」ですが、障害者雇用をするうえで、その対象者は「本人」だけではありません。「企業（同僚、上司、人事、経営者）」、「家族（パートナー）」など、本人の生活に大きく影響する人も含みます。この三つの支援対象者が互いに安心感をもち、適切な距離が取れるようになると、雇用がうまくいっている場合が多いのです。

支援の目的は、障害者本人の安定した就業生活ですが、企業や家族が本人を上手に見守ることができるよう、支援することが大事と考えます。見守ることは、必要なときに適切な手入れができること、を指します。就業と生活は切り離せず、いいことも悪いことも両方に反映されます。だれでも後悔が悪いときには仕事のパフォーマンスが下がりますが、障害の影響により、それがより強く影響し合うと考えられます。そのため、目の前で起こっていることの背景には、「仕事以外のことも含めてきずなことが関係しているかもしれない」という視点が大切です。

総合的に情報把握することで、適切に見守ることができます。適切な見守りがあれば、本人は安心し、力を発揮することができます。障害者一人ひとり、見守り方のポイントは違うため、そのポイントを早く理解するためにも、企業が支援を上手に活用することをおすすめします。

《役割分担と連携》

この図は、効果的な就労支援を行うために、関係者が、分野・機関・職種にかかわらず、特に連携しておく必要がある基本的関係をまとめています。支援機関と連携を考える際に、この図の一番内側の3つの分野に分けて考え、全体でできる部分、外部の支援機関に分担する部分などを検討材料にし、本人や地域と相談して体制を整えられるとよいと考えます。

※出典：各種機関が「障害や発達による人の経済支援の基礎知識～誰もが職場を上手として社会参加できる仕方を求に向けて」（厚労分担と連携より）

職場内の支援者と外部の支援者

では、実際に支援を行う人や機関は、どのような人たちでしょうか。「本人」、「企業（家族）」、この三者を支援対象とする機関が支援先になります。三者すべての支援を一つの機関で行う必要はありません。どこがその役割を引き受けるかについては、まだまだ地域の実情によって違うので、仕組みが必要です。その役割を担う規模があっても、ニーズ（たとえば定期訪問など）によっては心もとないこともあります。

支援先になる機関の例としては、本人が在籍していた就労支援機関、通院先の病院、就業生活支援センター、障害者職業センターなどがあります。

外部機関だけでなく、まずは内部の専任担当など、企業内でも支援者、支援担当部署を配置する企業もあります。支援機関とかかわる時ったことが分ない障害者の方もいますが、支援を希望すれば就労後でも登録は可能です。その際は、ハローワークや自治体の障害者支援の担当課に聞くと、地域情報を教えてくれます。

外部の支援機関の活用例

実際の支援例をあげてみましょう。

聴覚障害のあるAさんは、雇用期間後に職場に勤いていましたが、勤務時間、企業担当者から「ミスを多く、仕入がちであると言われました。そのため、企業を訪問してAさんと支援者で面談することにしました。

Aさんと面談してみると、ミスをすることや、早くできないことを打ち明けてくれました。ほかにも、通院等医などの治医師告知してくれました。支援者はAさんのトーンに合わせ、うなずきながら復唱し、ゆっくり次の言葉を待ちます。すると、しばらく沈黙があった後に、「私、大丈夫なんですか ね。ちゃんと役に立てているんでしょうか」という言葉が出てきました。

本人の言葉・行動には本人なりの気持ちが反映されていると考えます。ミスの原因はいろいろあるため、「作業工程が複雑だったのか」「職場が高かったのか」など、特性に合わせた配慮を見者することも大事です。しかし、その裏にある「不安感」が強く作用している場合も多くあると経験から感じられます。

このような場面では、外部の支援機関の存在が重要です。なぜなら、本人自身も「なぜ体調が悪くなるのか」「あせるのか」など、その原因を客観的に把握するのがむずかしいからです。障害のある方の多くは「自信がない」ということも関係しています。外部の支援者、または、内部でも直接業務にたずわらない人が、本人の不安のなかで、何が大きいのかを把握できると、早く解決策が見つかります。

スケール研（本人は「内集に慣れる」、「人・場所に慣れる」、「慣れる」ことで慣れ外の状況です。そこから、慣れた後に少しずつやってるのが、「固相と調和できているか（や「役に立っているのか」という期待感や評価の部分であることが多いものです。これを解決するには、「対話」が重要と考えます。

支援機関は、この「企業と本人の対話づくりを支えること」が大きな役割なのです。

認定NPO法人Switch
常務理事
小野彩香

障害者雇用～「ここまたい」あるある～

Q：雇用にあたり、障害の詳細について、どの程度社内へ伝えるべきかありますか？

A：これは、本人から伝達するとなる場合が多いです。理由は「本人が他人と比べること」ことを防ぐためです。実は、障害者雇用において、この「本人と相談して決める」ことは非常にメリットがあります。そのため、企業側もメリットを理解した方がよいです。本人と相談して決めた「伝達内容」は、「何を伝えるか」、「どこまで伝えるか」、「誰に伝えるか」の三つの要素からなります。

「何を伝えるか」のポイントは、障害の手帳の種類などよりも、障害（ひきこもりや発達障害）そのものの特徴を伝えます。「何を伝えるか」に絞れると、社内協力を得られやすくなります。もし、「精神障害の本人がどのくらい働けるのか」と、「どこまで配慮すべきか」は、通知の仕方を相談機関に相談して、その後、本人と話し合ってみてください。

■2017 年 12 月 27 日

「住友商事東日本再生ユースチャレンジ・プログラム 5 年の挑戦」に掲載されました。

座談会｜現地NPOのインターンを通じたチャレンジ

9ヶ月間のインターンを通して若者も受入れ団体も、ともに育つ

インターンシップ開始プログラムの受入れ団体とインターンの皆さんにお集まりいただき、9ヶ月間のインターン活動から何を学び、どんなことに苦労したのか、またその経験が今、どう活かされているかを語っていただきました。

登場者　※インターンに高橋的に関わり伴走、相談に応じている。

舘坂千晶さん[未来図書館インターン]（岩手県）
小野寺琉夏さん[Switch インターン]（宮城県）
大山綾平さん[ふくしまNPO ネットワークセンター インターン]（福島県）
恒川かおりさん[未来図書館メンター]（岩手県）
今野純太郎さん[Switch メンター]（宮城県）
内山愛美さん[ふくしまNPO ネットワークセンター メンター]（福島県）

聞き手
霜田美奈[特定非営利活動法人 プログラムオフィサー]

現場で何を見て震災をどうとらえるか頭の整理がしたくて参加

――本日は岩手県、宮城県、福島県からお集まりいただき、ありがとうございます。まずは、インターンに応募したきっかけから教えてください。

小野寺　大学の紹介で知ったSwitchから、プログラムのことを教えてもらいました。宮城県在住ですが被災地のボランティアに参加したことはなく、現場で何を見て、震災をどうとらえるか、頭の整理がしたくて参加しました。

舘坂　岩手県立大学で学生団体「復興girls&boys*」の代表をしていたことあり、公募ポスターの「東日本再生」、「復興」の文字に惹かれました。たくさんの人と出会って自分の価値観を広げたい思いと、NPOの仕組みを知りたい気持ちから未来図書館に決めました。

大山　宮城の大学から地元・福島の大学に編入した3年生のときに、母からプログラムのことを聞きました。震災当時は福島市内にいて、ボランティアにも参加しましたが、無力感しか感じなかった。もっと知識と経験を身につけたくて応募しました。インターンを受け入れるようになってから、団体でも新卒者を採用するようになり、今では新卒の子たちをインターンのように接しています。

――今だから話せる、つらいこともありましたか？

舘坂　小中高生と話すときは伝える難しさを感じましたが、手応えを確かめながら経験を重ねられたことで解決につながりました。お話を食べながらスタッフの皆さんに悩みを聞いてもらったこともあり、自分を理解してくれる人がいる安心感がありました。

小野寺　受益者を思うがゆえにヒントを出しすぎたり、価値観を押しつけたりしてしまうこともありました。そこが壁となって、なかなか自信がもてませんでしたが、メンターやスタッフに相談して、自分が手伝えることはほんの一部なんだと意識するようにしました。泣きそうになったことは何度もありましたが、インターンをやめようとは思いませんでした。

大山　いまだに解消できていない悩みもありますが、人の役に立ちたいという思いは残っています。今の仕事も福島と関係しているので、本当にこれでいいのかと自問を繰り返しています。何がどうなれば解決なのかわからないながらも、区切りをつけて、物事をまとめることの大切さを学びました。

――インターンを受け入れるにあたって、団体としてのご苦労もありましたか？

恒川　インターンを開始した初期の頃は、長く居を離れたり、ずっとおしゃべりしたりなど、いろいろなインターンがいて対応に悩みました。そこでオリエンテーションをすることで、この状況を回避するなど、経験を重ねながら手探りで学んでいきました。舘坂さんの頃にはインターンとの距離感がつかめるようになって、スムーズに進めることができました。

今野　つい手を差し伸べすぎてしまうほうなので、意識して出さないように努力しました。メールやLINEのやり取りが追加え、コミュニケーションがうまくいかなかったこともありますが、新入社員を受入れる際の勉強にもなりました。

内山　悩みを口に出せる人もいれば、出せない人もいて、そのインターンのことがわかるまではサポートもしづらかったけれど、それができるようになると私自身も成長したのを感じました。この何年かインターンを受入れた中で、常に体温を感じられる距離にいないと、お互いのことはなかなか理解できないものだと気づかされました。

職場でただ一人の、福島出身ということでインターンの経験が活かされていることを感じる日々

――活動の経験をこれから、どう活かしていきたいですか？

小野寺　当時は進路にも悩んでいたので、活動を通して自分のことを知り、自信をつけることができました。Switchに就職するというご縁までいただき、仕事をしていて楽しいと思える瞬間があるのもこのプログラムのおかげです。同期のインターン仲間とは現場で会うことも多く、今もつながっています。前年度から私もメンターとしてインターンに関わっていますが、プログラムのことを思い出すたびに初心に帰ることができます。被災した子どもたちが社会人になり、就職の悩みを抱える、これからが本番だと感じています。

小野寺さんの活動の様子（Switch 提供）

今野さん[Switch メンター]（宮城県）

恒川さん[未来図書館 メンター]（岩手県）

――受入れ団体の皆さんは、インターンを受け入れるにあたり、どのような印象を持ちましたか。

今野　30代以上の中堅しかいないスタッフの中に若者が入ったことで、私たちも「もっとしっかりしなければ」という意識が芽生えました。

恒川　岩手県内の小中高生のキャリア教育を支援する中で、活動に協力してくれる大学生の発想にはいつも感心させられていましたが、「復興girls&boys*」のメンバーでもある舘坂さんには、沿岸被災地の現状を教えてもらえるかもしれないという期待もありました。

内山　震災の前まで、東北では若い人はボランティアにあまり積極的でない印象がありました。面接で、問代村を割り番に活用する活動をしていることを話してくれた大山君からはイナーブで真面目な印象を受けました。

――インターン活動では、どんなことに取り組んだのでしょうか？

小野寺　「若者LPプロジェクト」のパソコン講座や、ストレスをコントロールする講座のサポートに入ったり、利用者さんとコミュニケーションを取ったり、就活の講座を企画したりしました。初めは胃に力が入ってしまいましたが、メンターに相談したり、もう一人のインターンと話し合ったり、中間報告会で仲間の受入れ団体で頑張っているメンバーの話を聞いたりしながら、自信につなげていきました。

今野　私たちはもともと精神保健分野で活動してきましたが、2013年は「ユースサポートカレッジ石巻NOTE」という若者支援事業を立ち上げた年で、ばたばたしていました。そんな中でもインターンは柔軟性があって、いろいろなことを吸収してくれました。

舘坂　私は「未来パスポートプログラム」などの手伝いをしました。中でも、沿岸被災地の中高生と熱く語り合う山田町ゾンタハウスの「かたるプログラム」は企画から運営まで任せていただいた初めてのプログラムで、話の組み立てには苦労しましたが、彼らの前向きな発言が刺激になりました。

恒川　津波ラッシュが続いた被災地では、勉強しなくてもお金を稼げると考える中高生が出始めていて、先生から、子どもたちが年齢の近い大学生と語ることで将来について考えるプログラムを作ってほしいと依頼を受けていました。「復興girls&boys*」で活動していた舘坂さんは山田町の状況にも詳しく、中高生の揺れ動きを感じさせるプログラムに仕上げてくれました。

大山　僕は現地協力団体*のインターンだったので、ほかの受入れ団体のインターンたちの月次報告書の取りまとめや中間・修了報告会の運営、他団体の取材などをしました。いろいろな情報が入ってくる立場でもあり、福島の現状にも触れることができました。つらい思いをすることもありましたが、そのときの経験も、今の仕事に活かされています。

内山　私たちの団体では、毎年実施しているインターン会議の企画もインターンに任せているんです。難しく何度も企画案を突き返しましたが、根性をもって、最後までやり遂げてくれました。それぞれのNPOにはカラーがありますが、一つに染まることなく、フラットに見る目を養ってほしくて、広く団体さんを取材したり、いろいろなものを面接見たり感じたりしてもらいました。

舘坂さん[未来図書館インターン]（岩手県）

舘坂さんの活動の様子（未来図書館）

手応えを確かめながら経験を重ねられた9ヶ月

――9ヶ月間という長期だからこそ得られたものは何かありましたか？

大山　いろいろな団体さんの活動を知ることで視野が広がった。福島という複雑な土地だからこそ、物事を客観的に見ることの重要性を感じました。インターンだけではなく、さまざまなことで悩んでいた時期だったので、大学時代の大切な思い出の一つになりました。

舘坂　NPOは非営利だからこそ、物事一つひとつに思いやりをもち、人の思いを理解し、参加者のことを考えてプログラムをつくることの大切さを学びました。次は少しやり方を変えてみようとか、どんどん試せたのも長期プログラムの良さだと思います。

小野寺　9ヶ月の間にいろいろな方の気持ちと遭遇し、価値観や課題、苦さといった自分の新たな一面を知ることができました。皆さんに教えていただかなければ、学生生活の中では決して気づけなかった

*復興girls&boys：3者に名称を変更された。現在ではプログラム実施に当たり、高校生活動のインターンシップ参者のインターン参取りまとめの役割を担う。

小野寺さん[Switch インターン]（宮城県）

と思います。

――インターンを受入れることで、団体として得たものはありますか？

恒川　舘坂さんの視点が新鮮で、大人が忘れている大事なことを思い出させてくれました。私たちは年間約30校の小中高校に行くんですが、彼女はほぼすべてに参加し、私たちが出せないようなクイズを考えたり、会場設営の際も大人の4倍くらい動き回ったりしてくれました。大学生への伝達方法を考える中で、視覚的なものを採り入れる工夫をするなど、スタッフの伝え方にも改善が図られました。

今野　一緒に働いてみると意外に仕事ができるので、スタッフに緊張感がありました。私たちがいつも支援している受益者と同じくらいの年齢なので、若者がどこでつまずくのか教えられました。また、インターンの受入れは、団体の人材育成の強化にもつながりました。組織基盤がまだ固まっていない時期にこういう刺激をいただけて、ありがたく思っています。

内山　NPOを支援する"中間支援"を理解するのは難しいことです。福島には放射能という見えないものの被災者を支援している団体もあるので、なおさら難しかったと思います。若い人に教えることで逆に学ばされることも、たくさんありました。インターンを受け入れるようになってから、団体でも新卒者を採用するようになり、今では新卒の子たちをインターンのように接しています。

――今だから話せる、つらいこともありましたか？

舘坂　小中高生と話すときは伝える難しさを感じましたが、手応えを確かめながら経験を重ねられたことで解決につながりました。お話を食べながらスタッフの皆さんに悩みを聞いてもらったこともあり、自分を理解してくれる人がいる安心感がありました。

小野寺　受益者を思うがゆえにヒントを出しすぎたり、価値観を押しつけたりしてしまうこともありました。そこが壁となって、なかなか自信がもてませんでしたが、メンターやスタッフに相談して、自分が手伝えることはほんの一部なんだと意識するようにしました。泣きそうになったことは何度もありましたが、インターンをやめようとは思いませんでした。

大山　いまだに解消できていない悩みもありますが、人の役に立ちたいという思いは残っています。今の仕事も福島と関係しているので、本当にこれでいいのかと自問を繰り返しています。何がどうなれば解決なのかわからないながらも、区切りをつけて、物事をまとめることの大切さを学びました。

――インターンを受入れるにあたって、団体としてのご苦労もありましたか？

恒川　インターンを開始した初期の頃は、長く居を離れたり、ずっとおしゃべりしたりなど、いろいろなインターンがいて対応に悩みました。そこでオリエンテーションをすることで、この状況を回避するなど、経験を重ねながら手探りで学んでいきました。舘坂さんの頃にはインターンとの距離感がつかめるようになって、スムーズに進めることができました。

今野　つい手を差し伸べすぎてしまうほうなので、意識して出さないように努力しました。メールやLINEのやり取りが追加え、コミュニケーションがうまくいかなかったこともありますが、新入社員を受入れる際の勉強にもなりました。

内山　悩みを口に出せる人もいれば、出せない人もいて、そのインターンのことがわかるまではサポートもしづらかったけれど、それができるようになると私自身も成長したのを感じました。この何年かインターンを受入れた中で、常に体温を感じられる距離にいないと、お互いのことはなかなか理解できないものだと気づかされました。

職場でただ一人の、福島出身ということでインターンの経験が活かされていることを感じる日々

――活動の経験をこれから、どう活かしていきたいですか？

小野寺　当時は進路にも悩んでいたので、活動を通して自分のことを知り、自信をつけることができました。Switchに就職するというご縁までいただき、仕事をしていて楽しいと思える瞬間があるのもこのプログラムのおかげです。同期のインターン仲間とは現場で会うことも多く、今もつながっています。前年度から私もメンターとしてインターンに関わっていますが、プログラムのことを思い出すたびに初心に帰ることができます。被災した子どもたちが社会人になり、就職の悩みを抱える、これからが本番だと感じています。

内山さん[ふくしまNPO ネットワークセンター メンター]（福島県）

大山さんの活動の様子（大山 提供）

大山さん[ふくしまNPO ネットワークセンター インターン]（福島県）

団体プロフィール

特定非営利活動法人未来図書館
[2014年～2016年受入れ]
活動：家族の激しい社会の中で、たとえば助けが難しいと社会的に問題とされている自分の人生を豊かで生きていく力を育むために、子どもと社会をつなぐことをミッションとし、一人ひとりが自分らしく豊かに生きていく社会の実現を目指す。約千葉市の小中高校の授業で、多様な生き方や価値観をもつ複数の大人とグループに分かれた子どもたちが学び合う「未来パスポート」プログラムや、設定したテーマについて語り合う「かたる」プログラムなどを展開している。
設立：2004年
所在地：千葉県千葉市中央区新町2－20 ホ2ビル3階
URL：http://www.miraitosho.com/

認定特定非営利活動法人Switch
[2012年～2016年受入れ]
活動：広く精神保健分野での教育・支援活動を行う。未来ある若者が将来に希望をもち、地域で安心して生活していくことができるように「学ぶ・働く」という観点から、多様性を認め合う社会に向けて、さまざまな提案や発信をしている。高等教育機関対象型の授業（医学）から就労支援までのフリースクールサポート、精神障害者の訪問支援、メンタルヘルス研修（教育機関・企業・医療その他）、外国人・外学中の方への面接・学生支援などを行っている。
設立：2011年
所在地：宮城県仙台市宮城野区榴岡1－4－3 東口榴岡ビル 602
URL：https://switch-sendai.org/

認定特定非営利活動法人ふくしまNPOネットワークセンター
[2013年～2016年受入れ]
活動：全国・福島県内の市民活動団体・非営利活動団体・個人の公益的活動をサポート、マネジメント支援、地域活動や人材活用を活発に行い、それらの活動を支援し、市民・行政・企業との ネットワークづくりを行う。21世紀の新しい市民社会を築くために市場自主企業を興隆、市民社会をつなぐ身近な情報発信、NPO・市民活動の開発情報や相談事業、機関誌の出版、講座の開催、調査研究などを行っている。
設立：2000年
所在地：福島市太田町 12-30 マルヘリービル 6F
URL：http://f-npo.jp/

■2017 年 5 月 15 日

仙台市社会福祉協議会　「福祉みやぎ」復興　宮城のいま　掲載

復興 宮城 の いま

被災地を訪問して無料パソコン講座を展開！

認定特定非営利活動法人Switch（スイッチ）

▲パソコン講座の受講者とSwitchのスタッフ。和やかな雰囲気に徐々に受講者の緊張もほぐれ、熱気が高まります。

■私たち認定NPO法人Switchでは、被災地域の支援の一環として無料パソコン講座とお年相談会を実施しております。

■Switchのスタート

認定NPO法人Switchは、平成23年3月22日、ちょうど東日本大震災の一週間後に設立しました。当初は心に不調を抱えた若年者の「まなび」「はたらく」をサポートするために、職業サービス事業を設置し、あわせて精神疾患を抱えた若者の就労サポートを目的としていました。

しかし設立直後の震災により、法人の取組み分野は大きく拡大することとなりました。

■沿岸部での就労課題

比較的復旧が早かった仙台市内沿岸部と比較して、沿岸部、特に死者・行方不明者3600人以上という甚大な被害を受けた石巻市において、雇用対策が取り組まれ、復興は大きな遅れを余儀なくされました。

なかでも就労と就学の課題は表裏に深刻でした。住まいが流出し、家族も失い途方に暮れる20代、30代の働き盛りの方や、沿岸部で被災し、内陸の学校に転校したものの適応できずに応急仮設住宅に引きこもる若者など、多くの課題が噴出してきました。

■被災者支援への取組み

そのような状況を受けて、私たちは「ユースサポートカレッジ石巻NOTE」を石巻市中心部に設置し、被災地域者の就労課題に取り組んでまりました。

大きな被害を受けた企業と連携し「有給職業体験プログラム　パイターン」を展開、すぐに企業内で働き始めることが難しい若者に対して、職業体験を積み重ねることで、ゆるやかに企業との信頼関係を築いていく伴走型の就労サポートや、多くの若者と地域の連携との接点を創出してきました。平成29年度からは、復興庁ところの復興事業の取組みとして石巻近郊に復興を支援し、仮設住宅の高に引きこもっている方々が外に出るきっかけにするための中間的就労の場として活用いただくことができました。

出張型就労支援としては、沿岸部の応急仮設住宅集会所を拠点に移動式のパソコン講座を実施し、「はたらく」への一歩を踏み出していただくプロジェクトを展開、連携には大手IT企業様や自治体、協力団体の皆様のご協力をいただき、社会福祉協議会様とも連携し、現在も気仙沼市民、牡鹿地区、東松島地区、多賀城・塩釜・七ヶ浜地区・岩沼地区にて、被災地や就労課題を抱えながらもなかなか外の出るきっかけがつかめない若者や高齢層など、幅広い年齢層の多くの方々に参加いただいています。

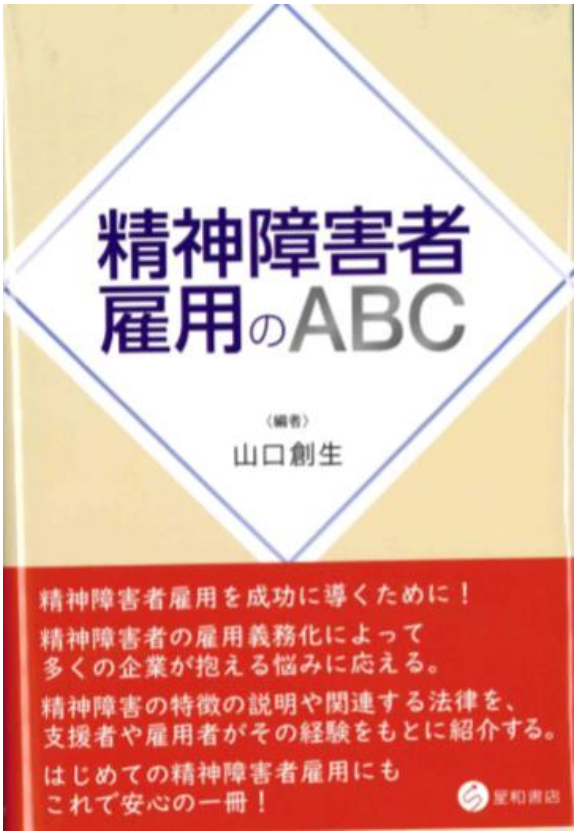
また、平成29年度は石巻圏域の高等学校2校と連携し、学校内に気軽に「まなび」「はたらく」について相談ができる定期的な窓口を設置し、高校生特有の就学、就労課題に取り組んでいます。

■若者支援のこれから

私たち認定NPO法人Switchは、震災後の東北で本当の復興を目指すためには、地域の未来に対や挑戦されそうになっている若者に、様々な方法で地域に出てきていただき、「本物の体験」を積みながら、将来的に地域の担い手になっていただくことが重要だと考えています。

これからもより多くの若者が希望を持って「まなび」「はたらく」ことができるよう活動を進めてまいります。（宮城県）

▲受講者ひとりひとりのペースに合わせて丁寧にサポートします。



【Cさんの場合】
雇用主が,会社に支援者が来ることを望まないケース

田口雄太
認定NPO法人Switch

Ⅰ．就労前の情報や関わり

Cさんは40代前半の男性で，以前は物流業界で配送の仕事を中心に勤務していました。30代後半で統合失調症を発症し，被害妄想や幻聴等の症状があり，休職を経て離職しました。受診開始から約半年が経ってから，主治医からの紹介で支援を開始しました。

寡黙なCさんは支援開始当初は意欲が低く，就労希望はあるものの希望職種も自身ではイメージができずにいました。また，自身の病気に対しての認識も低く，倦怠感の強さがCさんからの訴えでした。

関わりとしては，まずは一緒に街中を歩きながらCさんの興味，関心を中心にコミュニケーションをとる機会を多く持つようにしました。関わり開始から2ヵ月ほどで徐々に会話も増え，笑顔が見られるようになっていくなかで，前職の物流系の仕事はイメージができること，接客業やサービス業に興味があることを話すようになりました。

その頃から症状の整理をし始め，調子がよいとき，悪いときの状況の確認や，悪いときの対処法，余暇の過ごし方などを確認したり，日々の調子の変化をシートにまとめたりしながら，自分自身への理解を深めていく関わりを行いました。

Ⅱ．就職活動の過程と面接

関わり開始から2ヵ月頃の活動と並行して就職活動を始め，希望職種や働き方，通勤時間や休日，賃金等の条件の確認を行いました。

Cさんは，希望職種は少しずつ絞れてきましたが，条件はなかなか出せずにいたので，希望する職種の求人票を大量に並べて気になったものを数点ピックアップしてもらい，その求人票の共通点から条件を絞っていきました。また，ハローワークに一緒に行き，相談をしながら働き方を具体的にしていきました。

そのようななかで障害者雇用専門の集団面接会があり，そこで話を聞いたピッキング業務の求人を出していた物流会社から面接を受けないかという打診がありました。Cさんは物流の経験があり，面接後すぐに採用が決まりました。

Ⅲ．採用と企業側との打ち合わせ

採用が決まり，就業前にCさん，人事担当者，支援者で打ち合わせを行いました。その際に，会社の事務所，作業場ともに個人情報等の重ね合いもあり，支援者が立ち入ることが難し

支援者とのかかわり方

小野彩香
認定NPO法人Switch

・企業は，精神障害を持つ人の円滑な就労とその継続のために，支援者とサポート・チームを組むことができます。
・支援者には，できること（例：企業と精神障害を持つ人の間のコミュニケーションの促進など）と，できないこと（例：労働契約の説明や手続きの代行など）があります。

支援者の立場

支援者の立場とは，「中立」が模範解答です。しかし，支援機関のなかにも定着支援の経験が浅い機関もあり，また支援機関によって動ける範囲も差があるというのが現状です。そのため，企業側から見て支援機関によってかかわり方が違うこともあり，どこまでお願いできるのか等がわかりづらいのです。この項では，これから障害者雇用を始める企業に，支援機関に対する戸惑いがなるべく少なくなるように予備知識をお伝えし，どのように支援機関と付き合っていくと障害者雇用がうまくいくのかをお伝えします。

まず，雇用関係を結んだ時点で，雇用に関する責任や企業が従業員に保障する法律も同様に適用されます。雇用した人の人材育成という視点では，障害者雇用も同じです。まず，企業の管理下に置かれている状況に対して，外部の人間である支援者があれこれできない現状があります。

企業のなかには，支援機関に対して，働ける人材に育てる責任があるのではないかという気持ちを持つ人もいるでしょう。これは，知的障害者が多く通う特別支援学校の就職訓練（職場実習）の影響も大きいと思われます。18歳からの知的障害者の就労を考えたときに，高校1年生から将来を目標に学校が教育・訓練の機会を与えることはとても大切なことです。企業の中には，毎年定期的にくる支援学校の生徒さんのイメージから，学校（支援機関）は実習に向け，また将来の就職に備え，少しでも課題を達成できるような教育・訓練を提供すべきだと考える人も多いのです。そこから，送り出す責任と，支援機関の責任を混同している人もいます。

しかし，精神障害者の場合は少し違います。精神障害は，精神疾患の発症がもとになっていて，生まれながら持っているものではありません。彼らは，企業で働く健康な人とほとんど変わらない学歴やキャリアを重ねている人も多く，いろいろな人がいて，人生の背景や経験の幅が広いのです。そのような精神障害者は，就労までの手順も人それぞれであり，就労訓練を受ける人もいれば受けない人もいます。したがって，支援機関を利用する精神障害者の経歴も本当にさまざまであるため，個別対応をする支援者の立場は中立とはいっても，支援する内容は

■財務分析サマリ

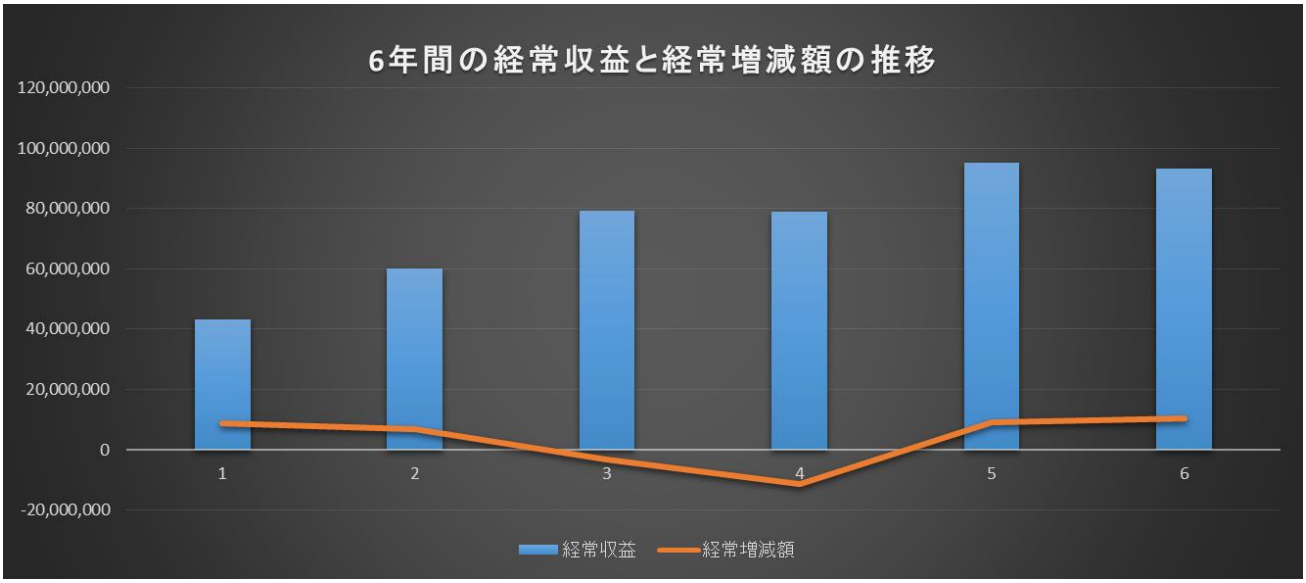
全体収益は福祉サービス事業の収益拡大によって年々増加しており、全体収支は 2016 年度に黒字に転換した。2017 年度は収益が微減したが、費用の縮小も進み。最終的な当期経常は増加した。

直近の収益バランスはスイッチセンダイの収益の割合が大きく、その他の事業所は赤字が続いている。その中でスイッチイシノマキは徐々に収益が拡大しており、2018 年度の完全黒字化を目指している。

一方でユースサポートカレッジ事業は助成金と委託事業で大半を占めており、将来的な財源に不安があると考えられる。

しかし、石巻 NOTE は地域の支援モデルの構築に向けての動きを取っており、仙台 NOTE は法人事業として先駆的な事業展開を進める部門として、ともに大きな役割を担っているため、中期計画を策定し安定した支援体制を構築する方策を検討する。

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
会費収入	245,000	35,000	105,000	105,000	105,000	80,000
寄付金収入	105,000	256,000	704,000	984,868	2,520,847	3,011,617
助成金・補助金収入	1,270,332	8,797,281	8,988,565	16,607,581	19,032,983	10,836,115
事業収入	40,517,154	49,943,928	68,382,230	58,795,494	71,929,393	75,232,874
うち移行サービス	40,517,154	49,943,928	51,245,733	53,852,894	67,781,149	75,232,874
移行比率	93.8%	83.0%	64.6%	68.2%	71.1%	80.8%
その他収入	1,079,191	1,146,296	1,146,768	2,496,666	1,706,065	3,986,493
経常収益合計:	43,216,677	60,178,505	79,326,563	78,989,609	95,294,288	93,147,224
事業費	12,869,431	871,303	2,899,731	2,379,893	587,000	66,969,847
管理費	21,477,447	52,545,168	79,594,877	88,082,568	85,615,035	15,653,066
経常費用合計:	34,346,878	53,416,471	82,494,608	90,462,461	86,202,035	82,622,913
経常増減額:	8,869,799	6,762,034	-3,168,045	-11,472,852	9,092,253	10,524,311
正味財産増減額:	8,869,799	6,762,034	-3,168,045	-11,472,852	9,092,253	10,524,311



■各事業の社会的インパクトの試算と金銭化の試み

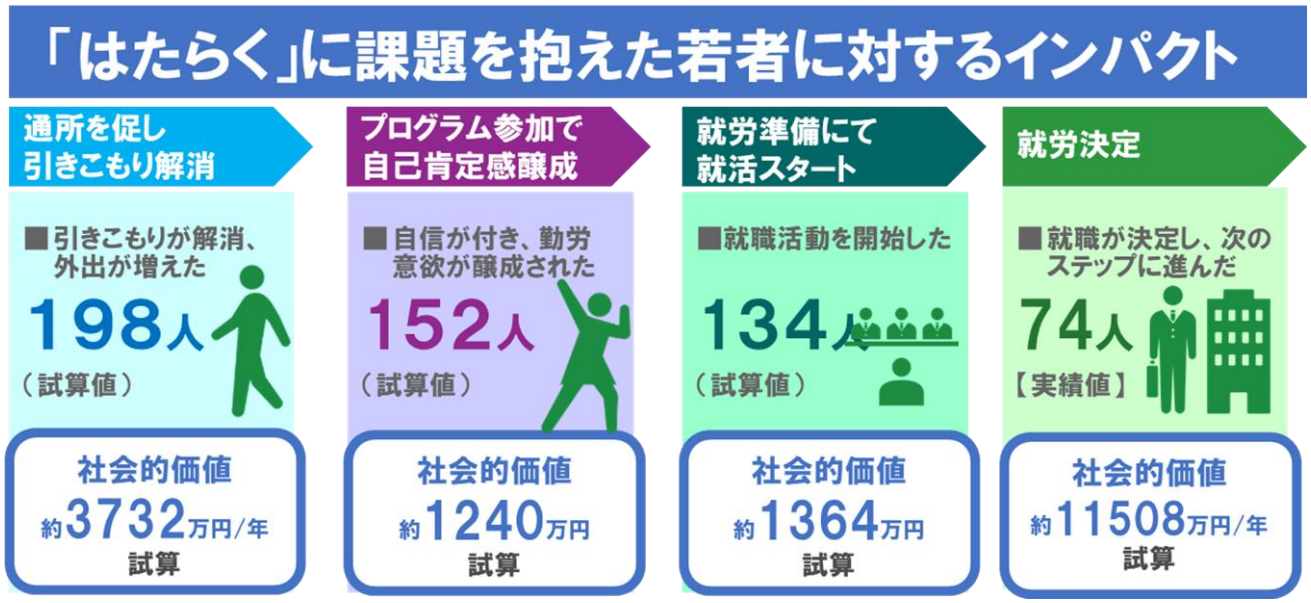
今年度各事業所の事業成果をまとめ、事業ごとの社会的インパクトを試算するとともに、その成果の金銭化に取り組むこととした。

金銭代理指標の設定や、死荷重の設定は、2016 年度、内閣府「社会的インパクト評価の実践による人材育成・組織運営力強化調査」事業の数値にて計算することとした。

					就職決定		
	利用者数	引きこもり解消	就労意欲の醸成	就職活動の開始	正社員	パート	福祉就労
スイッチ・センダイ	98	71	54	48	2	34	0
スイッチ・イシノマキ	22	16	12	11	1	3	1
仙台NOTE	62	45	34	30	8	11	0
石巻NOTE	92	67	51	45	8	5	1
					19	53	2
合計	274	198	152	134	74		
備考		※利用者の72.3%がSwitchに来ることで引きこもりが解消できた、と考えている。	※利用者の55.3%が、Switchに来ることで就労意欲が醸成されたと考えている。	※利用者の48.9%が、Switchに来ることで就職活動を開始することが出来たと考えている。			

					就職決定		
	利用者数	引きこもり解消による社会的価値	就労意欲の醸成による社会的価値	就職活動の開始による社会的価値	正社員決定による社会的価値	パート決定による社会的価値	福祉就労による社会的価値
スイッチ・センダイ	98	¥15,836,015	¥5,261,571	¥578,998	¥5,660,000	¥38,420,000	¥0
スイッチ・イシノマキ	22	¥3,555,024	¥1,181,169	¥129,979	¥2,830,000	¥3,390,000	¥710,000
仙台NOTE	62	¥10,018,703	¥3,328,749	¥366,305	¥22,640,000	¥12,430,000	¥0
石巻NOTE	49	¥7,918,008	¥2,630,786	¥289,499	¥22,640,000	¥5,650,000	¥710,000
合計	231	¥37,327,750	¥12,402,275	¥1,364,780	¥115,080,000		
備考		Switchに来ることで引きこもりが解消したと考える死荷重を0.599と設定（2016年度調査データに基づく） 1回あたりの支出金額3306円。月間外出増加回数6.8回にて試算。	Switchに来ることで就労意欲が醸成されたと考える死荷重を0.615と設定（2016年度調査データに基づく） カウンセリング費用4850円×年間カウンセリング回数18回にて試算。	Switchに来ることで就労活動が開始されたと考える死荷重を0.521と設定（2016年度調査データに基づく）。キャリアカウンセリング費用16200円×7時間にて試算。	正社員の平均賃金を年間2,830,000円と設定	パートの平均賃金を年間1,130,000円と設定	福祉的就労の平均賃金を年間710,000円と設定

社会的価値	¥166,174,805

SROI（試算値）	
スイッチ・センダイ	2.77
スイッチ・イシノマキ	0.81
仙台NOTE	17.20
石巻NOTE	3.31
NPO法人Switch	3.12

※SROI(社会的投資利益率social return on investment)とは、社会的活動を行う組織体における成果および業績を数量化して測定する指標の一つです。投下された資源に対する一定期間の純額としての利益および社会的な成果の比率として計算されます。
社会的投資利益率（%） ＝ 一定期間の社会的成果 ÷ 投下された資源額
今回は2016年度内閣府の「社会的インパクト評価の実践による人材育成・組織運営力強化調査」事業での評価指標を基準とした、試算値となります。
スイッチ・イシノマキに関しては自立訓練（生活訓練）事業となるため、今回の指標には必ずしも当てはまらず、別途指標を作成する必要がある。